

# 静岡県東部地域における 後期旧石器時代の石器群と遺跡分布の変遷

中村雄紀

**要旨** 静岡県東部地域は愛鷹・箱根山麓を中心として後期旧石器時代の遺跡が多数分布することが知られている。本稿ではこの地域の後期旧石器時代の編年について整理し、これに合わせて遺跡分布の変化をもとに当地域の後期旧石器時代遺跡の展開について簡潔な検討を行った。

現在知ることができる遺跡分布は地形形成や発掘調査密度によるバイアスを受けたものであるが、それを考慮しても以下の点が指摘できる。遺跡の分布には拡大期と縮小期があり、平均的な遺跡の規模と概ね相関する。第Ⅴ黒色帯、第Ⅱ黒色帯、砂川並行期以降は遺跡分布の極大期であり、第Ⅳ黒色帯・第Ⅲスコリア帯、ニセロームは極小期に当たる。遺跡は愛鷹山南東麓地域を核として展開しており、遺跡分布の極小期でもこの地域には安定して遺跡が分布する。その後、遺跡の地域的展開が進行する後期旧石器時代後半期に愛鷹山麓・箱根西麓の広範囲に遺跡が展開していくにつれて、遺跡分布に見られる愛鷹南東麓の優位性は薄れていく。細石刃石器群においてこの分布パターンは完全に転換し、箱根山麓では高地から低位丘陵まで取り込んだ居住パターンが展開している。

## 1. はじめに

静岡県東部地域は、愛鷹・箱根山麓を中心として後期旧石器時代の遺跡が密集する地域として知られている。当地域では後期旧石器時代初頭から遺跡の存在が確認されており、後期旧石器時代の遺跡全体では比較的緩やかな地形の低位丘陵から、起伏の激しい山地の尾根上まで幅広い地形に分布している。これは、ほぼ平坦な地形の台地を中心に遺跡が多く分布する南関東などとは異なる状況を示しており、地域の地理的特性に対応した土地利用が行われていたことを示している。

本稿では、この静岡県東部地域の後期旧石器時代における人類活動の展開を明らかにするための端緒として、遺跡分布の通時的な変化について検討を行う。

本稿は以下の構成をとる。まず、当地域の地形と遺跡分布の全般的傾向について概観する。続いて当地域の後期旧石器時代の石器群の変遷について整理を行い、最後にそれと対応する形で時期別の遺跡分布を提示し検討する。

## 2. 静岡県東部地域の地形と遺跡分布の概観

はじめに、静岡県東部地域（ここでは富士川流域から箱根・伊豆半島までの範囲とする）の後期旧石器時代遺跡の全般的な分布を概観しておく。

この地域において現在知られている遺跡分布では、愛鷹山南麓、及び箱根山西麓の丘陵地帯に遺跡の大部分が集中している。愛鷹山南麓一帯は火山麓扇状地堆積物により形成された緩やかな斜面地であり、放射状に開析谷が発達して細長い尾根が連なる地形となっている。その中では、桃沢川と高橋川との間の地域は傾斜が緩やかで開析谷の発達も弱いため、比較的幅の広い平坦な尾根となっている（図1）。箱根山西麓では箱根東京テフラ（約6万年前）に伴う軽石流堆積物により形成された緩斜面が遺跡の多い地帯と一致している。やはり樹枝状に開析谷が走り、細長い尾根が連なる地形となっている。こうした緩やかな地形の丘陵に遺跡が多く確認されている状況は、現代の土地開発・発掘調査の密度が高いこともある程度は関連している。

県東部の他の地域に関しては、調査密度や、それ以前に遺跡が見つかる可能性の高さの点で愛鷹山麓、箱根西麓とは条件が大きく異なる。

愛鷹・箱根山麓の東側は、箱根山周辺、柏峠など、黒曜石やガラス質黒色安山岩の原産地が分布することが知られているが、幾つかの原産地遺跡について断片的な資料が得られているのみで、まとまった発掘調査は実施されていない<sup>1)</sup>。伊豆半島東岸では遺跡は少なく、熱海市大越遺跡（熱海市教育委員会 1995）が知られている程度である。伊豆半島中央部では、発掘調査事例が限られているものの狩野川流域の段丘・丘陵上に点々と遺跡が知られており、遺跡の潜在的分布が期待できそうである<sup>2)</sup>。

愛鷹山の東（箱根山との間）、北、西側は後期更新世から完新世にかけてたびたび富士山からの溶岩流や泥流が流れ込んで現在の地形が形成されている。このため、愛鷹山麓をはさんで東西に緩やかな傾斜地が広がっているが大部分が後期旧石器時代より後に形成された地形で覆われており、

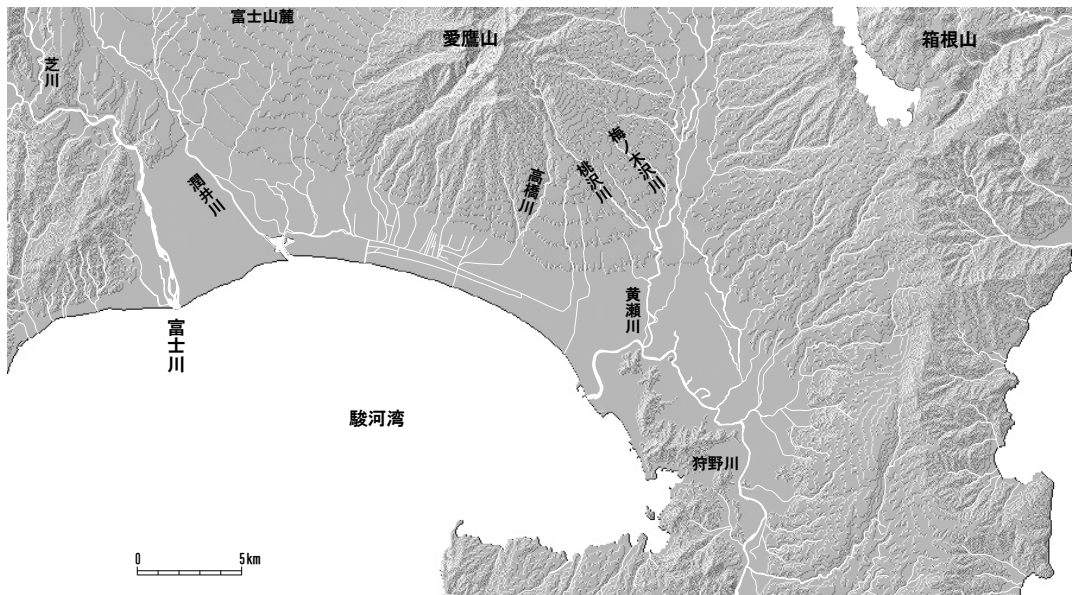


図1 静岡県東部地域の地形

旧石器時代の遺跡が存在していたとしても地下深くに埋没し、発見・発掘される見込みの薄い範囲となっている。特に西側の富士川流域は川谷沿いに甲府盆地へ抜け、信州黒曜石原産地へと向かう経路となりうる地域であるが、山梨県下まで含めても遺跡の数は少なく、溶岩流や泥流による埋没を免れた地点で細々と見つかるに留まっている。

以上のような地形形成上の要因や調査密度の偏りを考慮し、遺跡分布の検討は愛鷹山麓、箱根西麓を中心とし、その他は副次的に扱うこととする。

ところで、時期によって遺跡分布に偏りが見られるという指摘はすでに行われている。例えば第Ⅲ黒色帯期の陥穴状土坑群の分布は幅の狭い尾根が連続する地形と相関することが注目されている（今村 2006）。また、愛鷹・箱根山麓で遺跡が最も多く発見され、広範囲に分布することが知られているのは休場層に包含される、後期旧石器時代後半期後葉の遺跡であるが、箱根山麓ではそれに先立つ第Ⅰ黒色帯～休場層直下黒色帯で遺跡が少ない傾向が指摘されている（三島市教育委員会 1999）。本稿では以下で、こうした遺跡分布の変化について通時的に検討を行う。

### 3. 後期旧石器時代の石器群の様相

#### (1) 静岡県東部地域における後期旧石器時代の編年研究

遺跡分布の検討に先立って、石器群の様相を時期別にまとめておく。当地域の後期旧石器時代は、愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年（静岡県考古学会 1995）における大別 5 期・細別 11 段階を嚆矢とする 5 期区分とその細別段階により整理が行われることが一般的である。その後現在までに一部分の時期を対象としたものを含め多くの編年が示されており（池谷他 2010；笹原<sup>芳</sup> 1996・2005；高尾 2002・2006 など）、細別時期の区分や内容

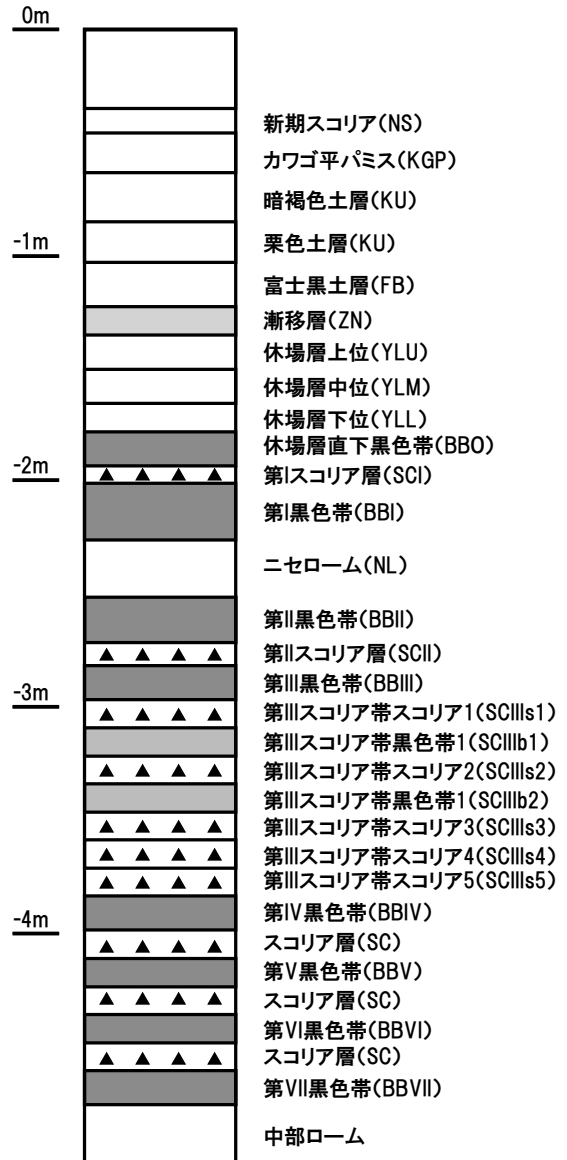


図2 愛鷹山麓の基本層序（桜畑上遺跡）

の異なる複数の見解が提示されている状況にある（例えば笹原<sup>3)</sup>氏 [1995] の第 2 期 a 段階は高尾氏 [2006] の a 段階と b 段階前半に相当する）。一方、それらの内容を十分に吟味しない形で個別石器群の記載に適用されるなど形骸化が進んでいる側面もある<sup>3)</sup>。

ここでは、先に挙げた既存の編年を勘案しつつ整理を行い、基本的に主たる出土層準（図 2）に基づき時期の呼称を設定する。但し、休場層の石器群については後述するように同様の取り扱いが困難なため、砂川並行期、ナイフ形石器終末期・尖頭器石器群、細石刃石器群に区分する。

## （2）第Ⅶ黒色帯・第Ⅵ黒色帯

当地域においてまとまった石器群が現れる最古の時期である。第Ⅶ黒色帯は上部愛鷹ローム層最下部の黒色帯で、中部ロームと第Ⅶ黒色帯との間に第Ⅳスコリア層が、また第Ⅶ・第Ⅵ黒色帯間、第Ⅵ・第Ⅴ黒色帯間にもそれぞれスコリア層が介在するものとされているが、これらのスコリア層はしばしば明瞭な形で観察されず、地点によって層序の差異が大きくなっており、遺跡間で整然とした層序対比ができていないため注意が必要である。例えば愛鷹山南東麓の比較的近接した地点に位置する向田 A 遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007b）、細尾遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010a）、追平 B 遺跡（長泉町教育委員会 1996）、富士石遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010g）の層序を比べると、第Ⅵ・Ⅶ、或いは第Ⅴ～Ⅶ黒色帯が細分されなかったり、第Ⅳスコリア層が観察されなかったりしている。

量的にまとまった資料としては、第Ⅶ黒色帯で富士石遺跡第Ⅰ文化層（図 2-1～8）、梅ノ木沢遺跡第Ⅰ文化層（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009c）、第Ⅵ黒色帯で富士石遺跡第Ⅱ文化層、中見代第Ⅰ遺跡（12～14）（静岡県考古学会 1995）などがある。この他、追平 B 遺跡第Ⅱ文化層 1～5 号ブロック（9～11）も同時期と見られ、また近年調査された井出丸山遺跡でもこの時期の資料が出土したとされている（池谷 2009a）<sup>4)</sup>。

この時期の資料が、少数のホルンフェルス製礫器など断片的にしか知られていなかった当初は、黒曜石が利用される以前にホルンフェルス主体の石器群の時期があったという推測もなされていたが、富士石遺跡第Ⅰ文化層では黒曜石主体の石器集中にホルンフェルス等も含まれており、逆にホルンフェルス主体の追平 B 遺跡第Ⅱ文化層 1～5 号ブロックでは少数の黒曜石製石器が伴っているなど、現在ではこの時期を利用石材により区分することは難しい。利用される黒曜石には柏峠、信州、神津島と各種産地のものが見られる。

富士石遺跡第Ⅰ文化層石器集中 2・3 は縦長剥片を素材とする基部加工石器（図 3-1～3）と幅広剥片素材の台形様石器（4）とが共伴している。基部加工石器には尖頭形のものが含まれる。同じく石器集中 1 では平坦剥離の発達した台形様石器が主体であるが、このうち 1 点（6）が石器集中 3 の基部加工石器と類似した形態を成すことが注意されている。また、基部加工石器、台形様石器とも両側縁に二次加工のあるものではしばしば錯向剥離が行われている。追平 B 遺跡第Ⅱ文化層 1～5 号ブロックでは鋸歯縁石器等を含むホルンフェルス製石器に黒曜石製の基部加工尖頭形石

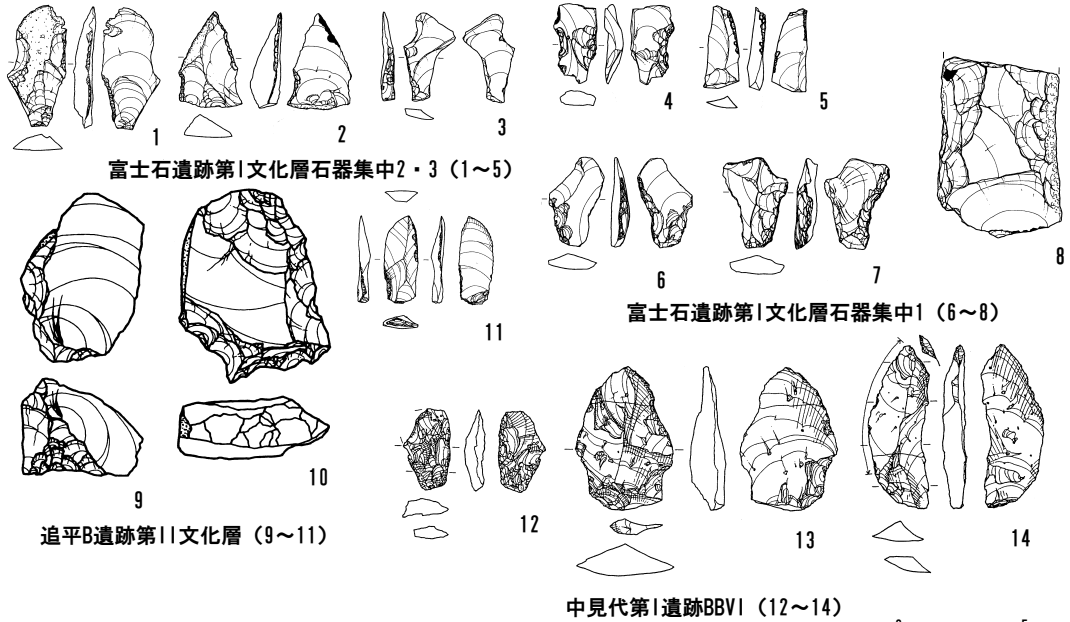


図3 第VII黒色帯～第VI黒色帯の石器群

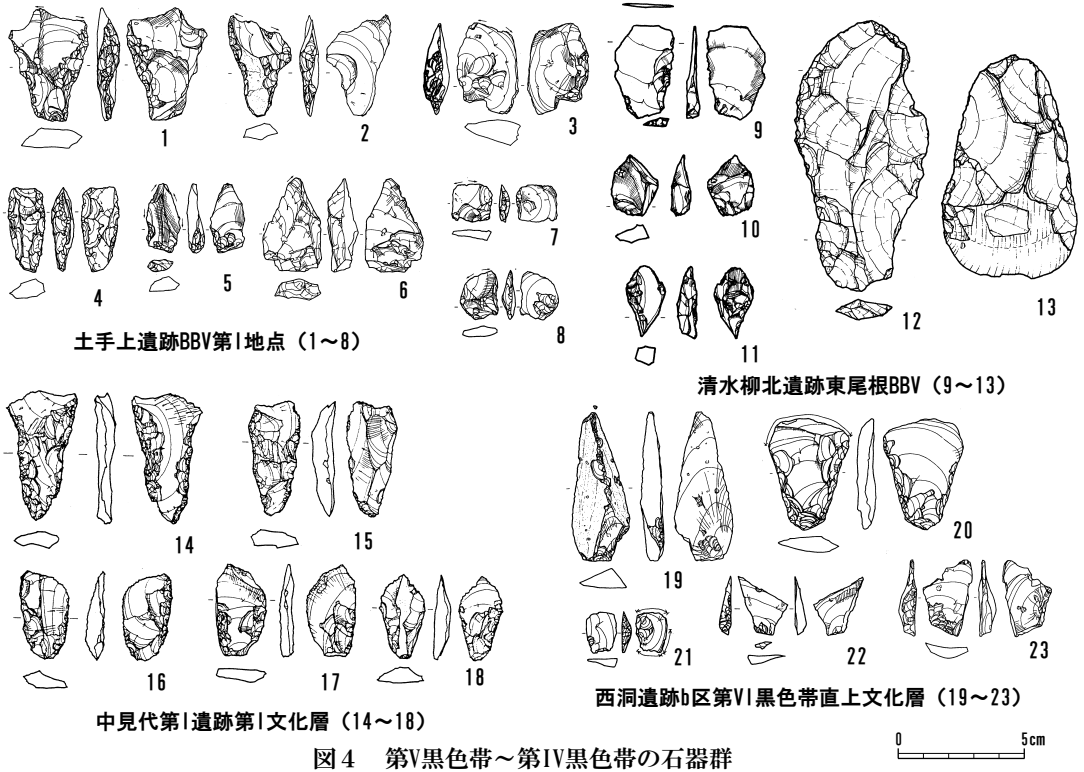


図4 第V黒色帯～第IV黒色帯の石器群

器(図3-11)が伴っている(但し、肝心の基部加工部位の大部分は新しい剥離で欠損していると思われる)。中見代第Ⅰ遺跡でも縦長剥片製の基部加工石器(図3-14)、平坦剥離による基部加工尖頭形石器(13)と台形様石器(12)とが出土している。

以上のように、縦長・縦打系剥片と結びついた基部加工石器と幅広・横打系剥片による横刃～斜刃の台形様石器とが見られるものの、富士石遺跡の例のように、両者の形態に類似性が見られる場合もあり、両者の機能は一部重複していた可能性もある。また、斧形石器は富士石遺跡第Ⅰ文化層石器集中1、梅ノ木沢遺跡第Ⅰ文化層で厚手、棒状で側面部を敲打したものが出土している。その他、これとは異なる形態と見られる斧形石器の破片が富士石遺跡第Ⅰ文化層で単独出土している。

### (3) 第Ⅴ黒色帯・第Ⅳ黒色帯

第Ⅵ黒色帯直上とされる西洞b区第Ⅵ黒色帯直上文化層(19～23)(沼津市教育委員会1999)、梅ノ木沢遺跡第Ⅱ文化層、生茨沢遺跡(静岡県埋蔵文化財調査研究所1999)、第Ⅴ黒色帯の中見代第Ⅰ遺跡第Ⅰ文化層(図4-14～18)、土手上遺跡d・e区BBⅤ(1～8)、清水柳北遺跡東尾根BBⅤ(9～13)(沼津市教育委員会1989a)などがある。第Ⅴ黒色帯では「環状ブロック群」とされる大規模遺跡が多くなる一方、第Ⅳ黒色帯では一転して遺跡が減少し、小規模な石器群のみとなる。

総じて縦長・縦打系剥片は目立たなくなり、幅広・横打系剥片による台形様石器が主体となる。縦長剥片製の基部加工尖頭形石器は西洞b区第Ⅵ黒色帯直上文化層に大形品の例(14)があるが、それ以外は基本的に小形の石器であり、台形様石器より大きさの変異が小さく数も少ない。また、板状の斧形石器(刃部を中心に磨かれたものが多い)の出土例が増える。

### (4) 第Ⅲスコリア帯

第Ⅲスコリア帯は5枚のスコリア層(SCⅢs1～5)と2枚の黒色帯(SCⅢb1・2)に細分され、SCⅢ-s1、b1、s2、b2、s3、s4、s5の順に堆積している。下位のSCⅢs3～5では遺跡がほとんどなく、多くの遺跡はSCⅢb2以上の層を出土層準とする。この時期に、愛鷹・箱根山麓ではそれ以前には見られなかった石刃技法が出現する。この時期の遺跡は小規模なものが多いが、その中で比較的まとまった資料としては向田A遺跡(図5-1～5)、秋葉林遺跡第Ⅱ文化層(静岡県埋蔵文化財調査研究所2009d)、野台南遺跡第Ⅰ文化層(静岡県埋蔵文化財調査研究所2009b)、中見代第Ⅰ遺跡第Ⅳ文化層(7・8)、富士石遺跡第Ⅵ文化層(6)などの石器群がある。

向田A遺跡では碧玉や柏峠産黒曜石による周縁型の石刃剥離を示す接合資料が見られる。富士石遺跡第Ⅵ文化層でも両石材が出土しているが、柏峠産黒曜石では剥片素材石核から小口面型の石刃剥離が行われている(6)。

非石刃形の石器群は中見代第Ⅱ遺跡第ⅩⅢ層(図5-9～14)(沼津市教育委員会1988)の例があるが、弧状一側縁背部加工ナイフ形石器(佐藤1992)や台形様石器の形態から上記2遺跡よりは新しい時期に位置づけられそうである。

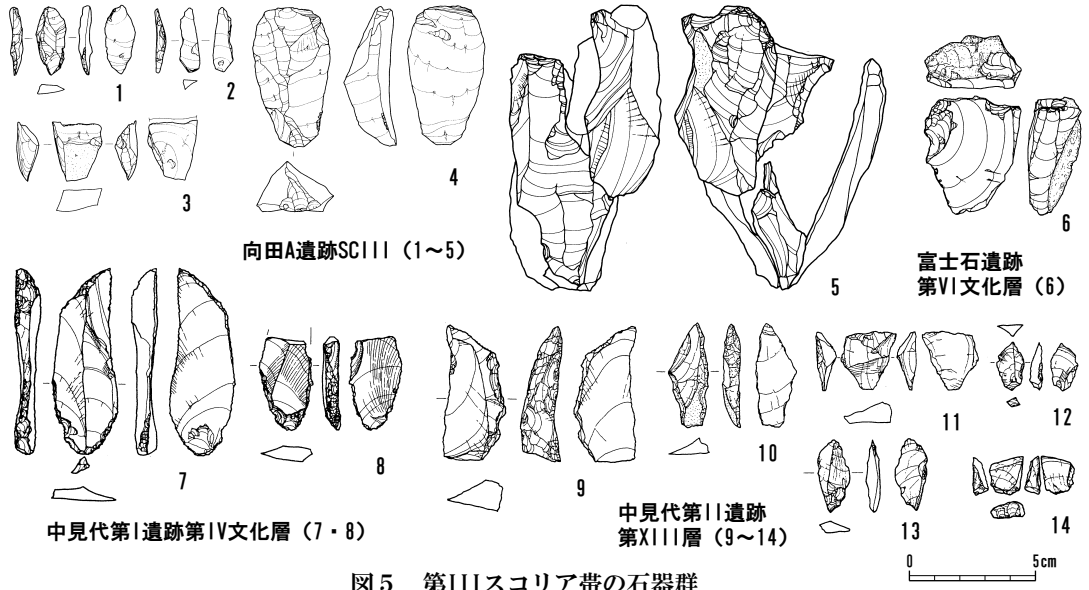


図5 第IIIスコリア帯の石器群

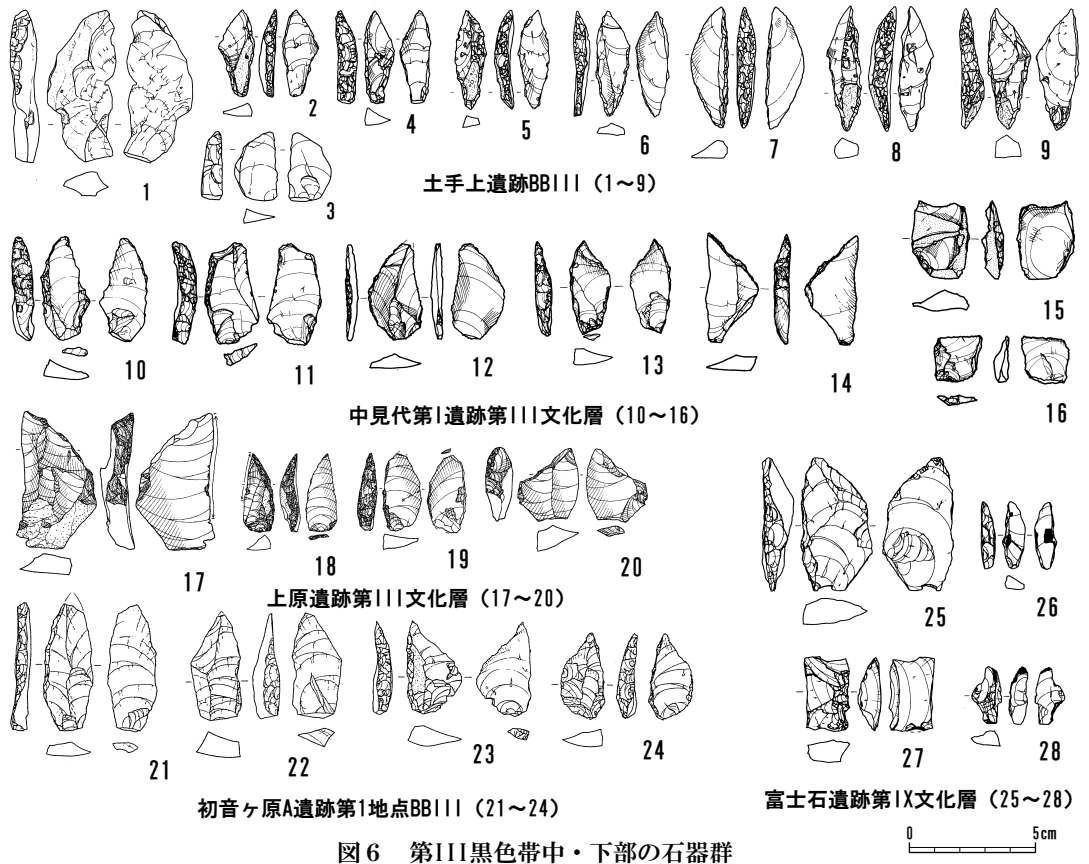


図6 第III黒色帯中・下部の石器群

### (5) 第Ⅲ黒色帯中・下部

一般的な傾向として石刃製作が低調で柏峠産黒曜石主体の石器群が多いことが指摘できるが、遺跡ごとに（石材が共通している場合でも）石器の形態的特徴の変異が大きい。

中見代第Ⅰ遺跡第Ⅲ文化層（図 6-10～16）の石器群は寸詰まりの剥片を素材とした、弧状の背部加工や直線的な背部加工による二側縁・一側縁加工が主体である。清水柳北遺跡中央尾根の石器群はこれと類似するが、相対的に細身の形態のものを含む。土手上遺跡 d・e 区（1～9）の石器群はこれらより大形の剥片を素材とした分厚い背部加工をもつ二側縁加工ナイフ形石器が主体である。上原遺跡第Ⅲ文化層（17～20）（函南町教育委員会 2001）は石刃主体であり、厚手の弧状一側縁背部加工ナイフ形石器を特徴とする。類似した石器は下ノ大窪遺跡第Ⅰ文化層（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008b）にも見られる。初音ヶ原 A 遺跡第 1 地点（21～24）の石器群は中見代第Ⅰ遺跡などに類似する黒曜石製小形ナイフ形石器に石刃製一側縁加工ナイフ形石器が伴う。また、中見代第Ⅰ遺跡第Ⅲ文化層や富士石遺跡第Ⅸ文化層（25～28）では矩形の台形様石器が見られる。

陥穴状土坑はこの時期に特徴的な遺構で、大半は第Ⅲ黒色帯の中部から下部が掘り込み面であったと考えられている。層位から判断して上記の石器群に近い時期に当たると見られる。

### (6) 第Ⅲ黒色帯上部～第Ⅱ黒色帯

主にホルンフェルスや珪質頁岩製の石刃製二側縁加工ナイフ形石器が発達する一方、相対的に小形の縦長剥片製二側縁・一側縁加工ナイフ形石器、切出形石器（信州・伊豆・箱根の各種産地の黒曜石のものが多いが、特に柏峠産黒曜石が多い）主体の石器群も見られる。

後者の例としては清水柳北東尾根 BB Ⅱ（図 7-15～21）の石器群がある。前者の例としては初音ヶ原 A 遺跡第 2 地点第Ⅲ文化層（1～11）（三島市教育委員会 1999）、西大曲遺跡（12～14）（沼津市史編纂委員会 2002）の石器群があり、背部加工の反対側の基部加工が内湾する形態の二側縁加工ナイフ形石器が特徴的である。富士石遺跡第 X Ⅱ文化層（22～27）では石刃製二側縁加工ナイフ形石器に黒曜石の縦長剥片製二側縁・一側縁加工ナイフ形石器が少数伴う。また、ナイフ形石器等をほとんど伴わず、ホルンフェルスの円礫を交互剥離などにより打ち割り剥片製作が行われた遺跡もしばしば見られる（細尾遺跡第Ⅲ文化層、塚松遺跡第Ⅰ文化層 [静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008d]、西願寺遺跡 A 層 [長泉町教育委員会 1978] など）。

また、西洞遺跡 b 区第Ⅱ黒色帯上部文化層（28～31）では大形の石刃製ナイフ形石器、基部加工尖頭形石器と中・小形のナイフ形石器、切出形石器が出土しているが、上記よりやや新しい時期に位置づけられる。

### (7) 第Ⅱ黒色帯上部～ニセローム

前時期に比して小形の縦長剥片製ナイフ形石器や切出形石器が主体となる。主な遺跡としては富



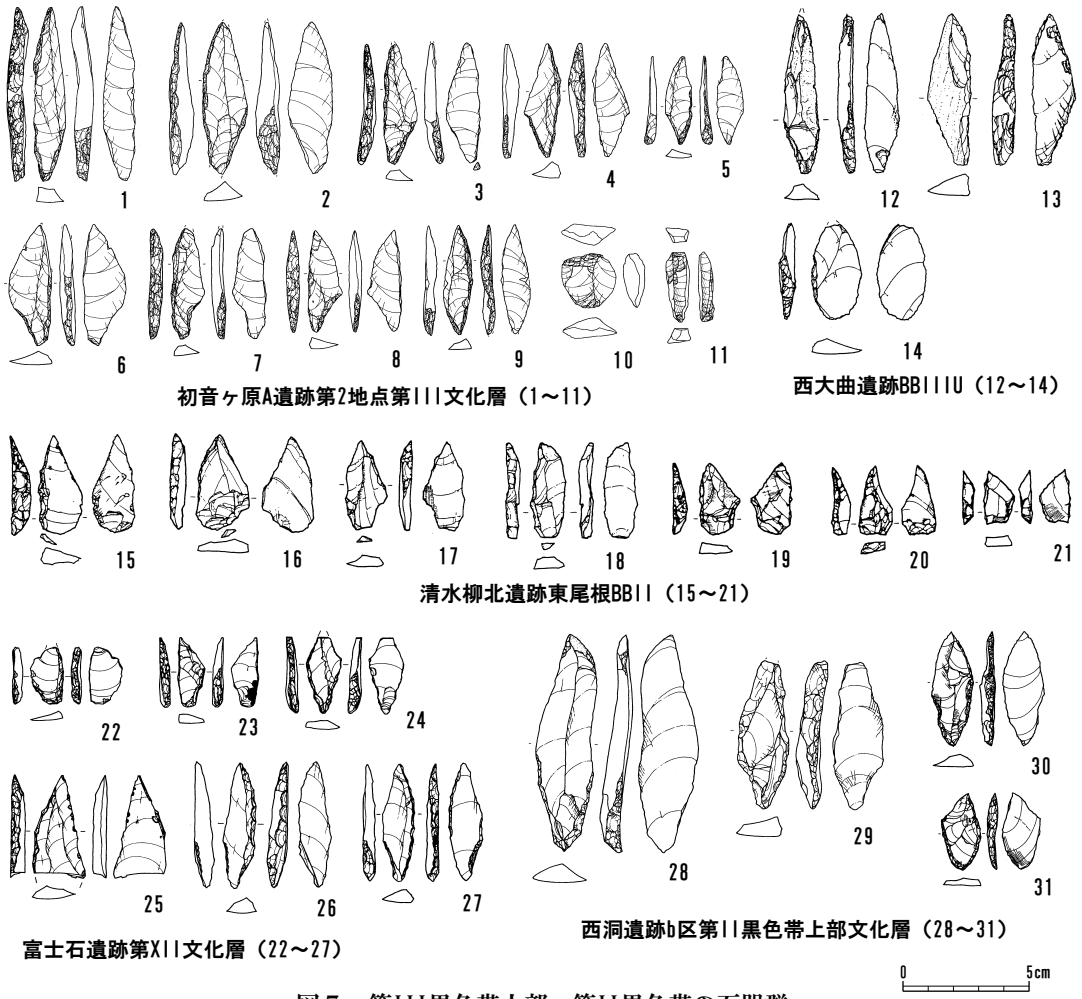


図7 第III黒色帯上部~第II黒色帯の石器群

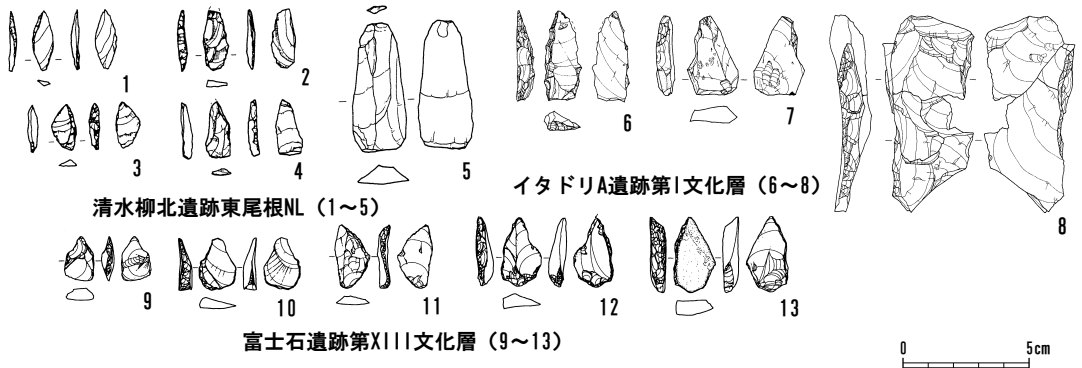


図8 第II黒色帯上部~ニセロームの石器群

士石遺跡第 X III 文化層（図 8-9～13）、清水柳北遺跡東尾根 NL（1～5）、イタドリ A 遺跡第 I 文化層（6～8）（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009g）などがある。

清水柳北遺跡東尾根 NL の石器群では 3cm 以下の小形の黒曜石製ナイフ形石器にホルンフェルス製の粗製石刃が伴っている。富士石遺跡第 X III 文化層は諏訪星ヶ台産黒曜石と柏峠産黒曜石とが主体の石器群で、両石材を利用したナイフ形石器も出土している。黒曜石の石刃製作を示す資料も出土しているが、ナイフ形石器には小形の剥片が用いられている。また、ホルンフェルス製の石刃等も少数伴っている。

その他の遺跡でも以上と同様に、石材は黒曜石とホルンフェルス主体、遺跡によってはそのうち一方が主体となる。ナイフ形石器には主に黒曜石が用いられ、ホルンフェルスは粗製石刃等に利用される傾向がある。黒曜石は柏峠産が多く見られるが、信州産も一定量利用されていたようである。

なお、始良 Tn 火山灰の降灰層準はニセローム下部付近に位置づけられており、この時期の石器群は AT 降灰期、VI 層段階の石器群に対応する。

## （8）第 I 黒色帯～第 I スコリア層

石器群には大きく分けて 2 つの様相が認められる。

第 1 は前時期と連続する小形のナイフ形石器に、円形搔器や楔形石器等を伴う石器群で、子ノ神遺跡第 II 文化層（図 9-1～4）（沼津市教育委員会 1982）、陣場上 B 遺跡第 I 文化層（5～8）（長泉町教育委員会 1994）、桜畑上遺跡（第二東名）第 V 文化層（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009e）、清水柳北遺跡 BB I 下部<sup>9</sup>などがある。これらの石器群は第 I 黒色帯下部を中心に出土しており、次に述べる石器群より相対的に古いと考えられる。

第 2 は石刃・縦長剥片を素材とする製基部加工尖頭形石器、一側縁加工・二側縁加工ナイフ形石器や厚形の背部加工をもつ二側縁加工ナイフ形石器を主体とする石器群で、やはり円形搔器や楔形石器等を伴う。上ノ池第 II 文化層（図 9-11～14）（静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998a）、イラウネ遺跡第 II 文化層（15～17）（長泉町教育委員会 1986）、梅ノ木沢遺跡第 VI 文化層などがあり、上ノ池第 II 文化層のように 1～2 点の角錐状石器を伴う場合がある。厚形背部加工の二側縁加工ナイフ形石器を欠き、石刃製基部加工尖頭形石器のみの石器群もあるが、これが時期差としてとらえられるかは現段階の資料では不明である。

この他、中見代第 I 遺跡第 II 文化層（図 9-18～20）、西大曲遺跡第 II 文化層のようにホルンフェルスの石刃を素材とする二側縁加工・一側縁加工ナイフ形石器を主体とする石器群が少数ながらある。第 I 黒色帯上部から第 I スコリア層出土で、第 2 の様相の石器群と併存していたものと考えられる。

## （9）休場層直下黒色帯～休場層下位

この時期の石器群も幾つかの様相に分けられる。但し、特に後半になると石器群間の変異が大き

静岡県東部地域における後期旧石器時代の石器群と遺跡分布の変遷

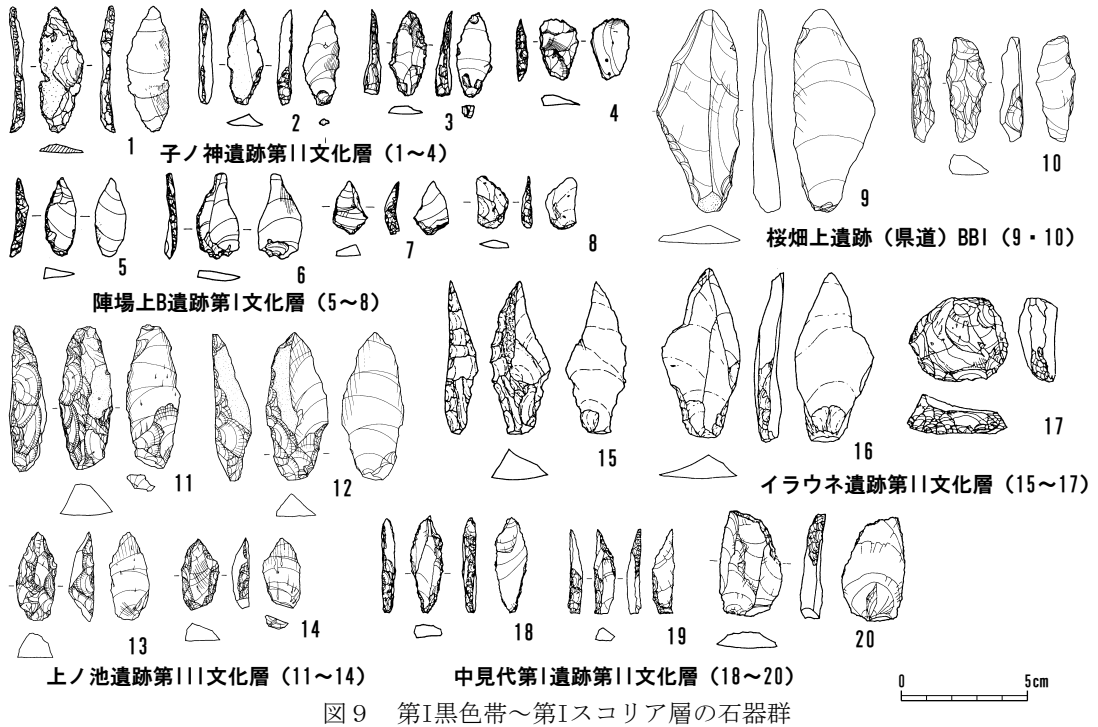


図9 第I黒色帯～第Iスコリア層の石器群

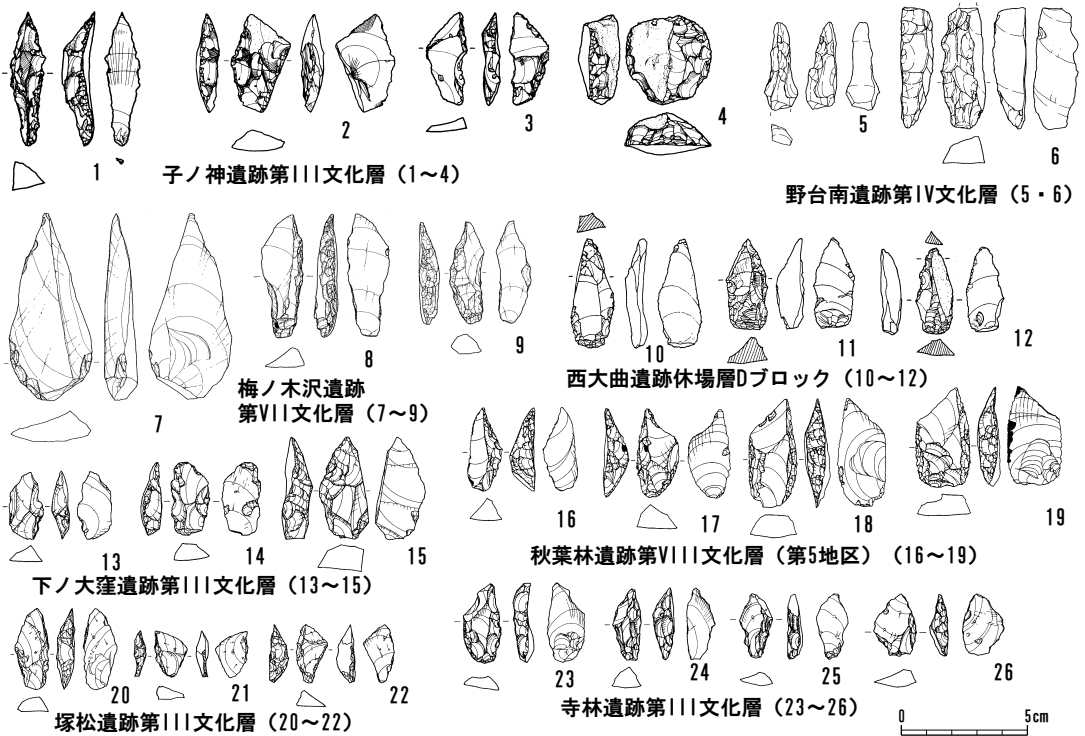


図10 休場層直下黒色帯～休場層下位の石器群

くなり、石器の器種・形態組成で単純にまとめることは困難になるが、以下のようにまとめておく。

まず第1に、角錐状石器を伴う石器群がある。中見代第Ⅱ遺跡第Ⅴ層、野台南遺跡第Ⅳ文化層（図10-5・6）ではホルンフェルス製のものが主体である。後者では二次加工が全周に及ばないものが存在する。子ノ神遺跡第Ⅲ文化層（1～4）では信州産黒曜石が主体である。角錐状石器はやや大形のものを含み、切出形石器等を伴う。これらの石器群の出土層位は休場層直下黒色帯下部に相当すると見られ、この時期でも古相に位置づけられる。

第2に、厚手の背部加工によるナイフ形石器、薄手の石刃・縦長剥片製の一側縁・二側縁加工ナイフ形石器、その他切出形石器等からなる石器群がある。これらの石器の組み合わせからさらに幾つかの様相に分けられる。

厚手の背部加工によるナイフ形石器は角錐状石器に類似した急斜度加工で整形され、砲弾形を呈するもので、西大曲遺跡休場層Dブロック（図10-10～12）のものが早くから知られていた。素材の用い方や加工はやや異なるが、下ノ大窪遺跡第Ⅲ文化層（13～15）、秋葉林遺跡第Ⅶ文化層石器集中14-16では類似した石器が出土しており、切出形石器や薄手の石刃製一側縁加工ナイフ形石器を伴う。これらの石器群は休場層直下黒色帯上部に位置づけられるようである。その他では、池田B遺跡（静岡県埋蔵文化財調査研究所2000）、桜畑上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第Ⅲ文化層エリアA、同エリアB（静岡県埋蔵文化財調査研究所2010c）などの石器群は基部・先端加工のナイフ形石器や一側縁加工のナイフ形石器から成る。塚松遺跡第Ⅲ文化層22号ブロック（20～22）（財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2008b）、入ノ洞B遺跡第Ⅲ文化層（静岡県埋蔵文化財調査研究所2008d）、清水柳北遺跡東尾根休場層10ブロック群、桜畑上遺跡（東駿河湾環状道路関連）第Ⅳ文化層エリアJではなどでは薄手の二側縁・一側縁加工ナイフ形石器、切出形石器が主体である。秋葉林遺跡（第5地区）第Ⅷ文化層（16～19）、向田A遺跡YL4号ブロック、中林山遺跡（三島市教育委員会2002a）では厚手の側縁加工をもつナイフ形石器、切出形石器が見られ、それに対し寺林遺跡第Ⅲ文化層（23～26）（静岡県埋蔵文化財調査研究所2003c）では遺物集中ごとにこれらの様々な要素が入っている。これらの石器群は休場層直下黒色帯上部～休場層下位にかけて出土している。

また、この時期に関しては尖頭器が出現する時期として注目されている。例えば、イラウネ遺跡第Ⅰ文化層では左右非対称の尖頭器（有樋尖頭器を含む）が、小形のナイフ形石器や切出形石器とともに出土しており、この時期の後半に属する可能性があるが、出土層位は休場層～休場層直下黒色帯<sup>6)</sup>内という以上の情報はなく、現在のところ類例の出土もない<sup>7)</sup>。

## (10) 砂川並行期石器群

これ以降の石器群は主として休場層から出土する石器群であるが、しばしば重複・混在して出土するため、層位的に明瞭な分離がなされているとは言い難い（但し、後者ほど層位的に上位から出土する傾向は認められる）。筆者はかつて、ナイフ形石器の形態や石器組成をもとに砂川並行期と

静岡県東部地域における後期旧石器時代の石器群と遺跡分布の変遷

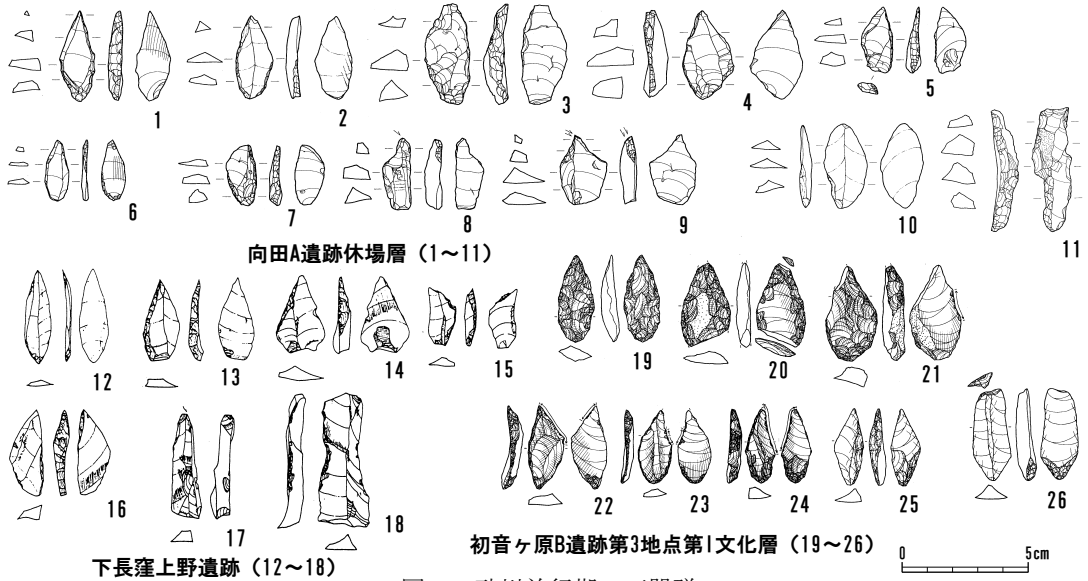


図11 砂川並行期の石器群

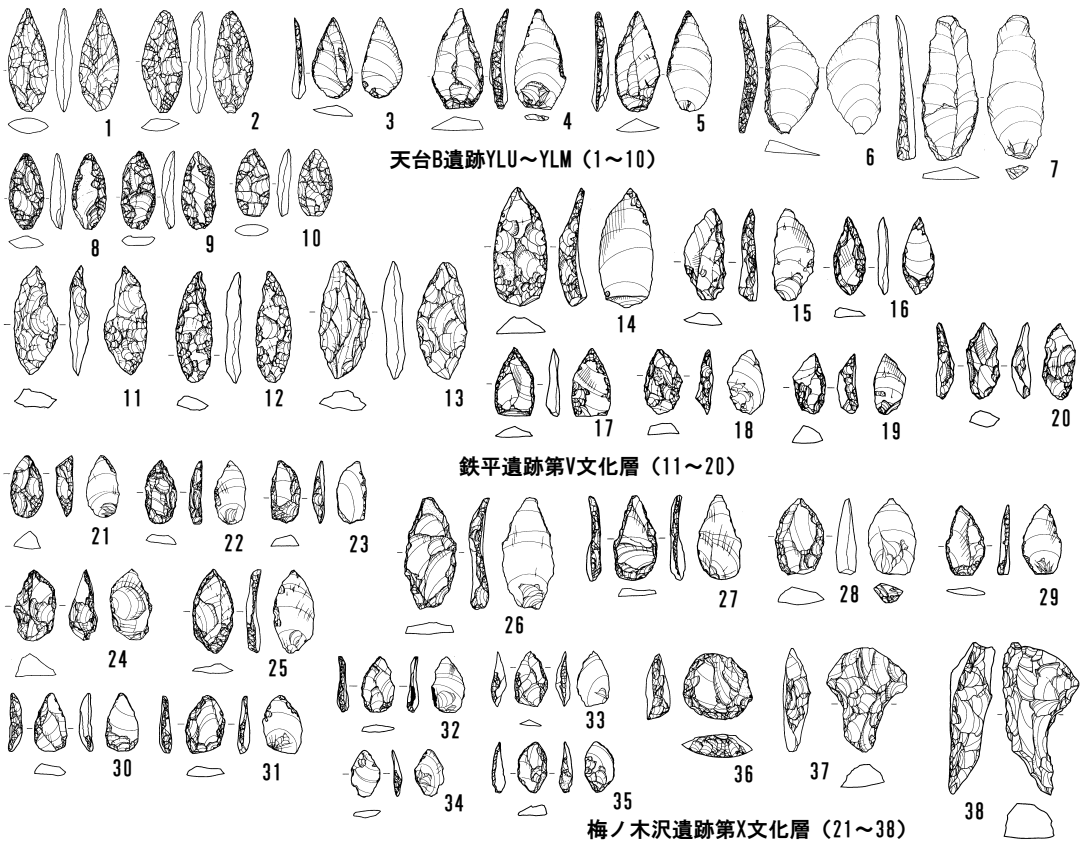


図12 ナイフ形石器終末期・尖頭器石器群

ナイフ形石器終末期以降を区分した（中村 2005・2006）が、休場層の石器群は資料の増加により前項の休場層下部の石器群の認定<sup>8)</sup>も含めて再検討が必要な段階にある。砂川並行期の石器群についても相対的に長狭な柳葉形のナイフ形石器をもつ一群と、やや幅広の涙滴形のナイフ形石器をもつ一群とが並行して存在した可能性が指摘される（笹原<sub>芳</sub>2010）など、再編成が求められている。ひとまずは前後の時期の石器群との混在の可能性が低い資料をもとに、暫定的にまとめておく。

当地域の砂川並行期としては、向田 A 遺跡休場層ブロック 08 を中心とする石器群（図 11-1 ～ 11）、下長窪上野遺跡（12 ～ 18）（長泉町教育委員会 1979）、二ツ洞遺跡 a 区 YL（沼津市教育委員会 1991）、片平山遺跡 YL（三島市教育委員会 1990a）、初音ヶ原 A 遺跡第 2 地点第 I 文化層、初音ヶ原 B 遺跡第 1 地点（三島市教育委員会 1998b）・第 3 地点第 I 文化層（19 ～ 26）、上原遺跡第 II 文化層などの石器群が挙げられる。ナイフ形石器は石刃製二側縁加工が主体である。形態は器体中央部付近に最大幅を持つ所謂「茂呂型」が主体であるが、遺跡内でも変異があり、やや幅広寸詰まりで「涙滴形」に近いものが含まれる場合も認められる。この他、斜刃で切出形に近いナイフ形石器や幾何形刃器、部分加工石刃なども少数含まれる。また、遺跡によっては上ケ屋型彫器（8・9）、石刃製挟入削器（11・18）といった南関東の砂川期と共通する器種が含まれている。

初音ヶ原 B 遺跡第 3 地点（19・20）や上原遺跡に見られるように、小形の尖頭器が伴う事例が少数ある。また、有樋尖頭器が出土した中見代第 I 遺跡第 I 文化層もこの時期と考えられる。

#### (11) ナイフ形石器終末期～尖頭器石器群

「涙滴形」のナイフ形石器や切出形石器、幾何形刃器、小形尖頭器などを主体とする石器群から中・大形尖頭器を主体とする石器群までを含める。休場層中位・上位から出土する傾向がある。

この時期も時期設定に検討を要するところであるが、砂川並行期と同様暫定的にまとめておく。

桜畑上遺跡第 VII 文化層 1 ～ 4 号ブロックは涙滴形のナイフ形石器、切出形石器を主体とし、鉄平遺跡第 IV 文化層（図 12-11 ～ 20）（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003a）、拓南東遺跡第 I 文化層（沼津市教育委員会 1998a）ではこれに主として中・小形の片面加工・両面加工尖頭器が伴う。天台 B 遺跡（1 ～ 10）（三島市教育委員会 1998a）では相対的に大形で狭長な形態を含む涙滴形ナイフ形石器が出土している。一方、梅ノ木沢遺跡第 X 文化層（21 ～ 38）（静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010h）は当該期の大規模な石器製作跡と見られ、石刃を素材として涙滴形のナイフ形石器、切出形石器などが製作されている。これらには 5cm 以上のものも含まれるが、1.5 ～ 3cm 程度の小形のものが大半を占めている点の特徴である。その他、搔器、削器類も多い。搔器は円形搔器（36）が主体で、削器も片側縁或いは両側縁全体を加工するような加工度の高いもの（37・38）が見られる。

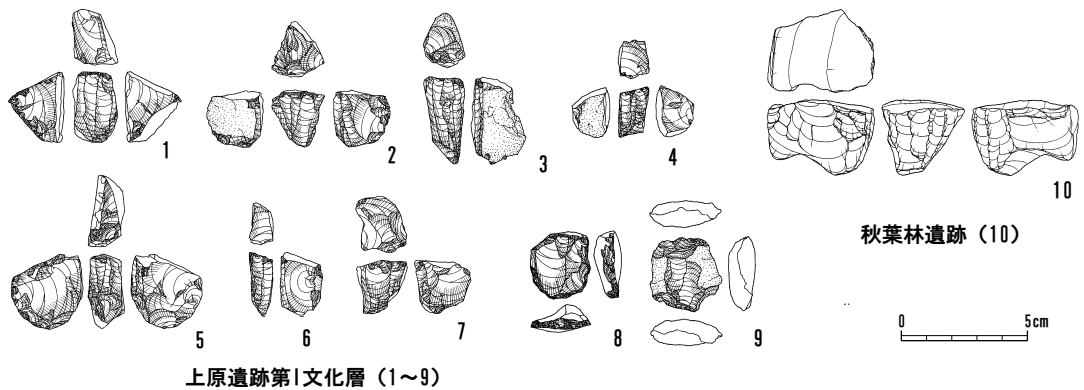
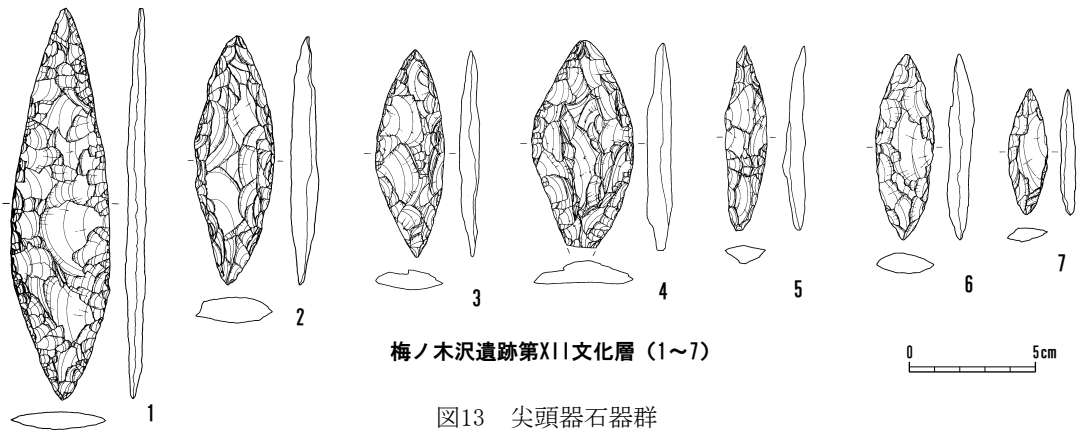
山中城三ノ丸遺跡（三島市教育委員会 1995a）に代表される中・大形の尖頭器石器群については、まとまった資料が少なく細石刃石器群に先行するものか、或いは並行・後続するものかといった時間的位置づけも現在のところ確定されていない（笹原<sub>芳</sub>2005）。梅ノ木沢遺跡第 X II 文化層（図 13-1 ～ 7）は中・大形尖頭器の製作遺跡で未製品や調整剥片を含む石器群が出土しており、報告書

では縄文時代草創期との位置づけが示されている。確かに「硬質頁岩」製の薄手で精緻な調整が施された大形両面加工尖頭器（1）は通例神子柴型尖頭器とされてきた形態のものであるが、出土層位は細石刃石器群（第X I文化層）とほぼ同じであり、また第X II文化層の主たる出土層準である「YL2」を休場層中位～上位に対応させる見解を支持するならば<sup>9)</sup>細石刃石器群以前に属する可能性も排除できず、周辺地域の事例も含め今後とも検討が必要であろう。

## (12) 細石刃石器群

細石刃・細石刃核により特徴づけられる石器群を一括する。主に休場層上位、漸移層、富士黒土層下部から出土する。この中には砂川並行期～尖頭器石器群の休場層の石器群と重複した分布を示す遺跡も多く、両者とも上下の層に拡散して分布することから層位的に明確な分離をすることが難しい場合もある。

こうした事情から細石刃・細石刃核以外の石器組成については不明な部分が多いが、上原遺跡第I文化層（図14-1～9）や休場遺跡（杉原・小野1965）など大規模な石器群の事例を参考にすると楔形石器や搔器等が伴う。細石刃と見られる石器が散在する遺跡も多いが、破片資料が多くナイ



フ形石器終末期の小形石刃と明確に区別することが困難なため、この後の遺跡分布の検討では細石刃核やその調整剥片が伴う石器群以外は除外している。

黒曜石製の稜柱形細石刃核を主体とする石器群が多く、柏峠、信州、神津島の黒曜石が用いられている。これに対しホルンフェルス製の船野型細石刃核が、富士山麓の小塚遺跡（沼津考古学研究所 1977）、愛鷹山麓の秋葉林遺跡（図 14-10）など少数ながら出土例が知られている。船野型細石刃核については、未報告資料だが土手上遺跡にまとまった資料が出土したとされ、層位的にも稜柱形より新しく位置づけられるという見解が示されている（池谷 2009a）。

## 4. 遺跡分布の変遷

### （1）検討の方法

前節で示した変遷観に従って、時期別に遺跡分布をまとめる。各時期について遺跡の分布図を示すが、これらは遺跡の規模によって区分した。ここで遺跡の規模は出土石器数、及び石器集中の有無を指標とし、石器集中は石器 4 点以上の集合をもって設定することとした。その上で次の 4 段階に分けて示した。

- a 類：石器数 500 点以上で、石器集中のある遺跡
- b 類：石器数 100 点以上、500 点未満で、石器集中のある遺跡
- c 類：石器数 100 点未満で、石器集中のある遺跡
- d 類：石器が集中部を成さず、散在・単独の状態出土した遺跡

また、遺跡の単位についても再検討した。石器集中、礫群などが分布の連続性や接合関係でまとめられる場合はこれを 1 単位の遺跡として扱い、積極的にまとめる理由がないものは別個の単位として扱った。したがって、調査区全体で 500 点以上の石器が出土していても、b～d 類の遺跡に分割されている場合がある。こうした遺跡では、提示した分布図においてドットが近接した範囲に重複している点に注意が必要である。

### （2）第Ⅶ黒色帯～第Ⅳ黒色帯（図 15）

全体として遺跡数が少なく、また箱根山麓ではこの範囲の層序区分が不明確であり正確な位置づけの困難な遺跡もあることから、一括して分布を示す。

全体的な傾向として、現在のところ発見されている遺跡は愛鷹山麓に多く分布し、それに比して箱根山麓では遺跡が少なく、しかもその大部分が小規模な遺跡である。

後期旧石器時代初頭にあたる第Ⅶ黒色帯～第Ⅵ黒色帯に相当する石器群に確実に位置づけられそうな石器群は現在のところ愛鷹山麓に限られる。特にまとまった資料のある遺跡は南東麓一帯の標高 150～200m の地点に分布し、桃沢川の北側の富士石遺跡、追平 B 遺跡、梅ノ木沢遺跡、中沢川



静岡県東部地域における後期旧石器時代の石器群と遺跡分布の変遷

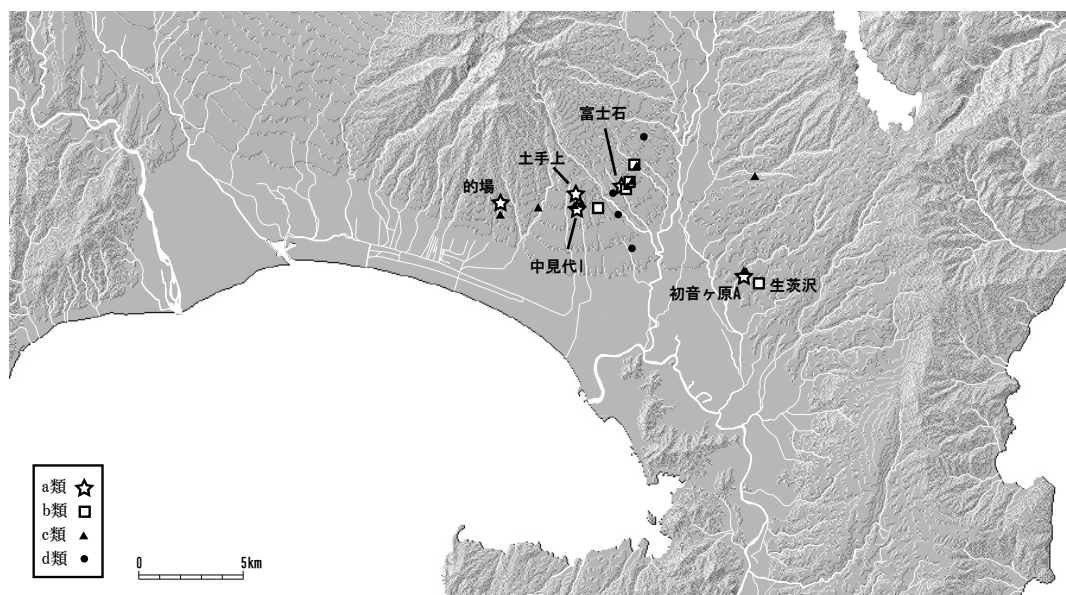


図15 第VII黒色帯～第IV黒色帯の遺跡分布

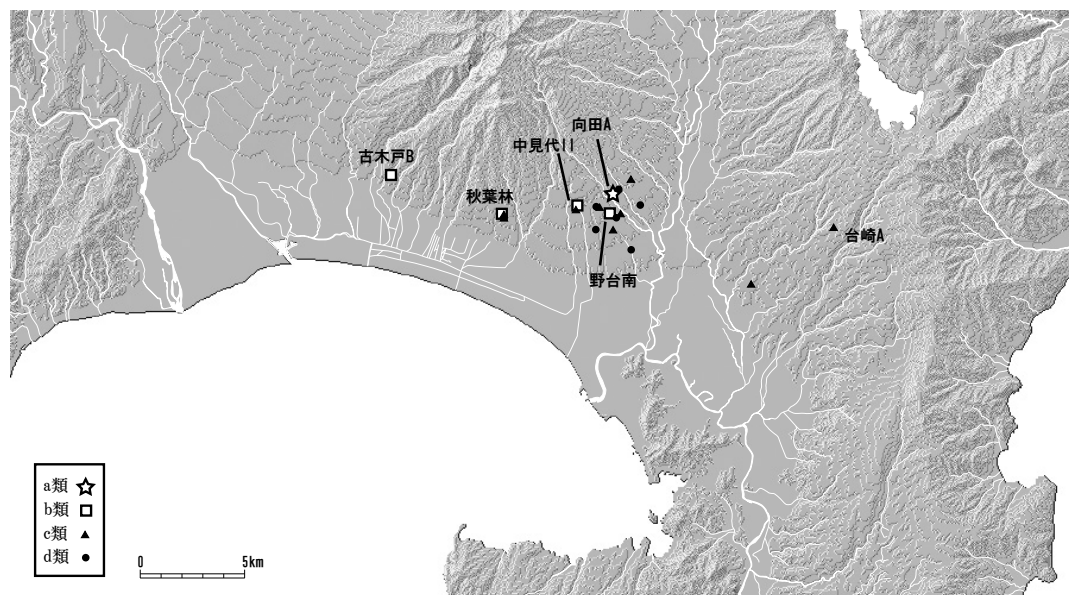


図16 第IIIスコリア帯の遺跡分布

流域の中見代第Ⅰ遺跡などがある。但し、最近第Ⅶ黒色帯の石器群が調査された井出丸山遺跡はこれらとは異なり、海岸平野に近い山裾の低地に位置する。

これに続く第Ⅴ黒色帯に相当する石器群が出土した遺跡はより広範囲に分布する。特に第Ⅴ黒色帯は「環状ブロック群」とされる土手上遺跡や中見代第Ⅰ遺跡のように1000点以上の規模の石器群が出現する時期であり、全般的な遺跡規模も前時期より大きくなる傾向がある。愛鷹山麓では他の場遺跡、西洞遺跡、清水柳北遺跡、梅ノ木沢遺跡等があり目立った遺跡が見られなかった箱根山麓でも生茨沢遺跡や初音ヶ原A遺跡が現れる。初音ヶ原A遺跡では、第2地点で第Ⅴ～Ⅶ黒色帯に相当する層の上部から小規模な石器集中が出土している他、正式報告は未刊だが第1地点では柏峠産黒曜石を主体とする500点以上の石器群が出土したとされる（三島市教育委員会1999）。

第Ⅳ黒色帯を出土層準とする石器群はほとんどなく、僅かに愛鷹山麓の二ツ洞遺跡a区、箱根山麓の佐野片平山G遺跡などがあるのみで、しかも石器数十数点程度の小規模な遺跡である。

### (3) 第Ⅲスコリア帯 (図16)

第Ⅳ黒色帯以降の遺跡の減少傾向は第Ⅲスコリア帯の上半にあたる黒色帯2以降で回復する。但し、この時期の100点以上のまとまった石器数を擁する遺跡は愛鷹山麓に限られる。遺跡規模では1遺跡のみ突出している向田A遺跡をはじめ、愛鷹山南東麓で多くの遺跡が見つまっているが、それ以西でも秋葉林遺跡、古木戸B遺跡と点々と遺跡が分布する。

一方、箱根山麓では小規模な石器集中が見つかった下原遺跡など、零細な遺跡が少数分布するのみである。但し、最近調査された台崎A遺跡（三島市教育委員会2009b）でこの時期の石器群が出土したとされる。立地が標高約400mの尾根上と愛鷹山麓の遺跡より200m以上高所に位置し、当該期の土地利用を考える上で注目に値する。

### (4) 第Ⅲ黒色帯中・下部 (図17)

陥穴状土坑が現れる時期であり、前時期に比べて箱根山麓へ遺跡分布が広がった印象を受ける。

すでに指摘されている通り陥穴状土坑のある遺跡は桃沢川以東及び高橋川以西の愛鷹南麓、及び箱根西麓に分布する。一方、石器群から成る遺跡は、愛鷹山麓では南東麓に多く、清水柳北遺跡、土手上遺跡など大規模な遺跡もこの地域に分布する。箱根山麓では大規模な遺跡として初音ヶ原A遺跡第1地点、上原遺跡がある他、小規模な遺跡がやや北寄りの一帯で見つまっている。

この時期の遺跡に関しては、石器群が残された遺跡と陥穴状土坑群が残された遺跡とが背反的に分布するとされており（池谷2009b）、愛鷹山麓ではこの時期の大規模な石器群は桃沢川以西・高橋川以東の愛鷹南麓に分布している。箱根山麓の初音ヶ原A遺跡などと陥穴状土坑群との時間的関係については現状では明らかではない。

### (5) 第Ⅲ黒色帯上部～第Ⅱ黒色帯 (図18)

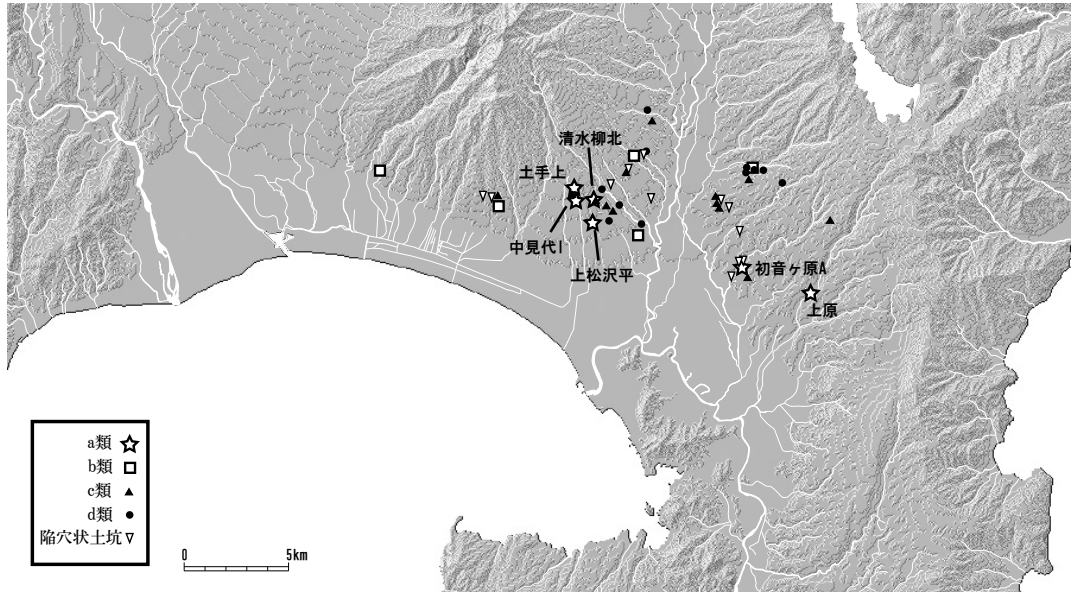


図17 第Ⅲ黒色帯中・下部の遺跡分布

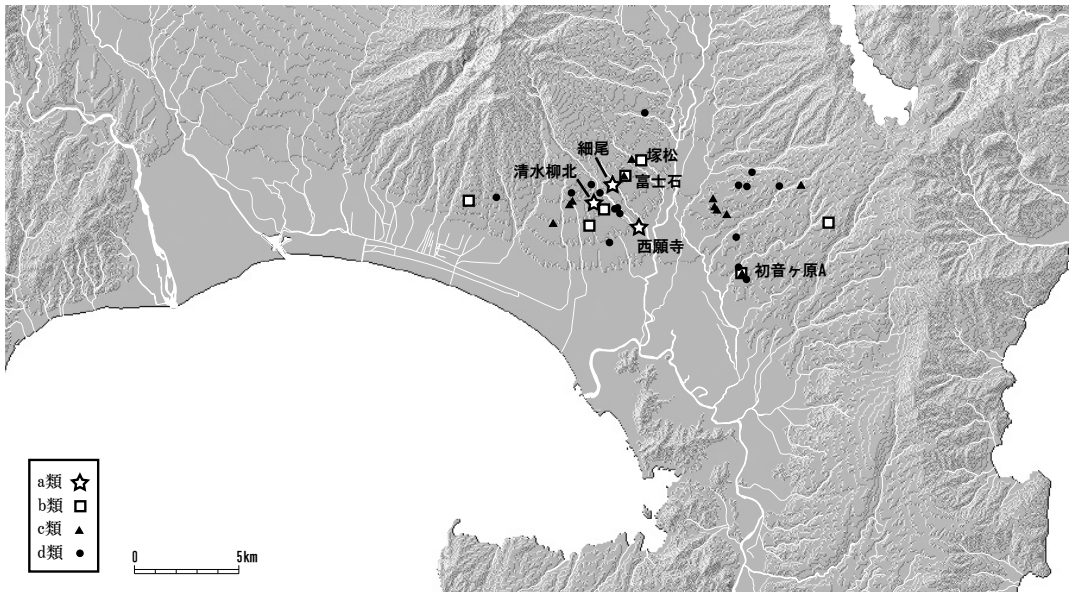


図18 第Ⅲ黒色帯上部～第Ⅱ黒色帯の遺跡分布

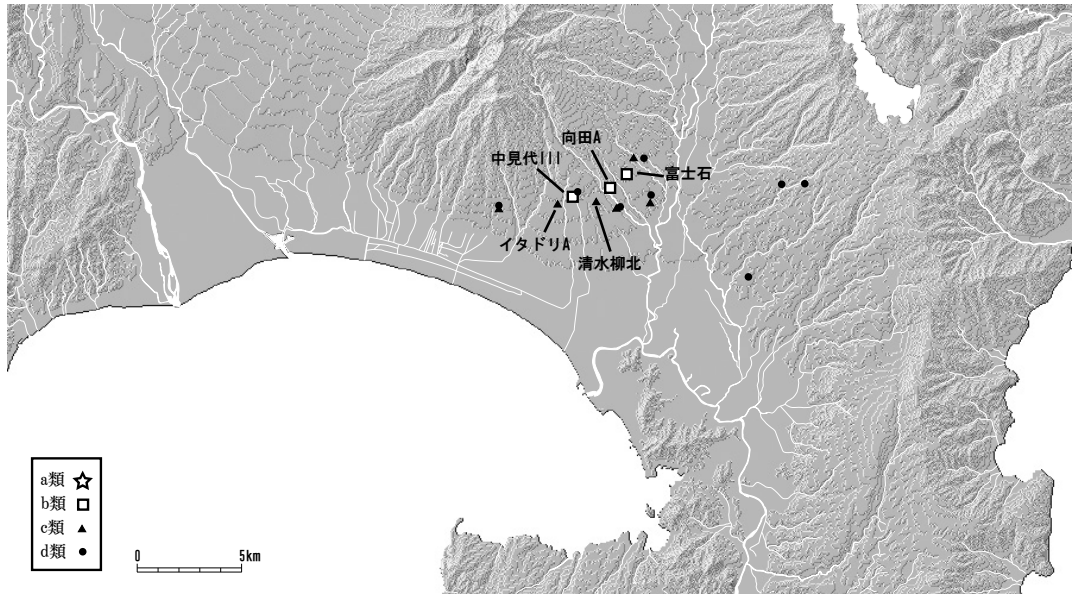


図19 第II黒色帯上部～ニセロームの遺跡分布

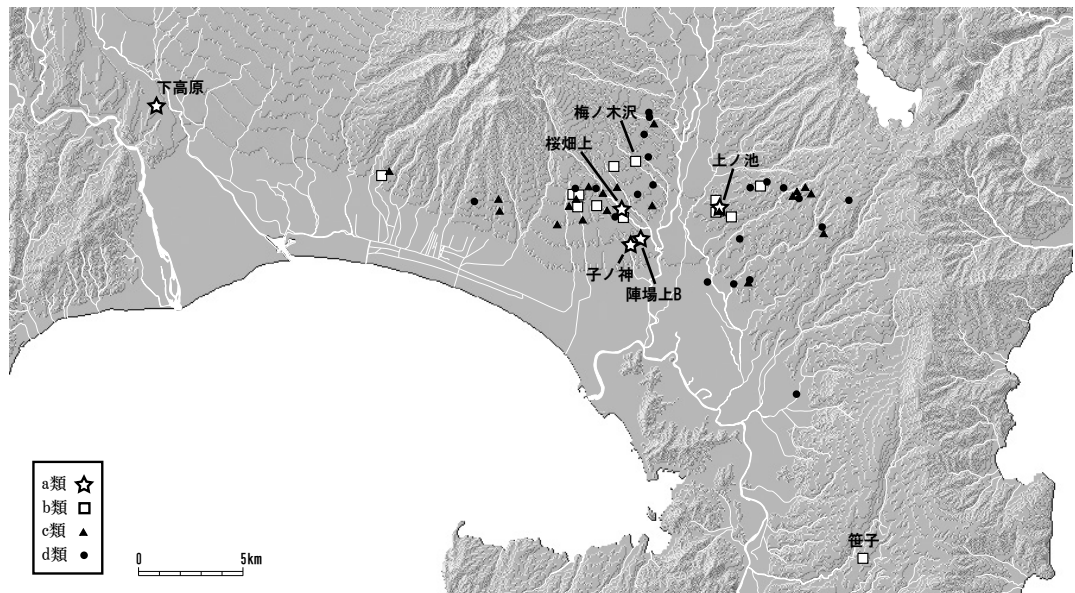


図20 第I黒色帯～第Iスコリア層の遺跡分布

前時期と同様、愛鷹山麓、箱根山麓とも広い範囲に遺跡が分布する。愛鷹山麓では規模の大きい遺跡は南東麓を中心に見つかっている。箱根山麓では、観音洞 G 遺跡、台崎 A 遺跡など標高約 400m の地点にも遺跡が分布する点が注目される。

#### (6) 第Ⅱ黒色帯上部～ニセローム (図 19)

遺跡分布は縮小し、愛鷹山麓では南東麓を中心とした地域で遺跡が見つかっているが、全体的な遺跡規模は縮小する。箱根山麓では現在のところ少数の遺物が散在する d 類遺跡しか見つかっていない。

#### (7) 第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層 (図 20)

前時期に比べて遺跡は増加し、遺跡規模も大きくなる。厳密には、この時期の第Ⅰの様相とした第Ⅰ黒色帯下部の石器群として明らかな石器群は愛鷹山麓で見つかっているのみであり、遺跡分布が拡大するのはそれ以降と見られる。愛鷹山麓では南東麓を中心に東西に遺跡が分布する。箱根山麓では上ノ池遺跡を中心に北寄りの地域に大規模な遺跡が偏っており、それ以南では零細な遺跡が分布するのみである。

また、この時期では愛鷹・箱根山麓以外でも遺跡の存在が明らかになり始め、富士山麓で下高原遺跡が見つかっている。問題となるのは伊豆方面の笹子遺跡である。黒曜石製の石刃石器群であるが時期認定の基準となる資料に乏しい。高橋豊氏 (1997) による層位認定 (石器群の出土層準は AT 上位で休場層より下位に相当すると推定されている) が正しければ第Ⅰ黒色帯下部に位置づけられる可能性がある。

#### (8) 休場層直下黒色帯～休場層下位 (図 21)

前時期よりさらに遺跡は広域に展開している。愛鷹山麓では、第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア帯期に南東麓に限られていた a 類遺跡がそれ以外の地域にも分布し、箱根山麓でも a 類・b 類遺跡の分布が南側へも広がっている。富士山麓の下高原遺跡はこの時期の資料も含んでいる可能性が高い。

#### (9) 砂川並行期石器群 (図 22)

遺跡数が増大する時期であり、d 類遺跡まで含めると膨大なものとなるため、分布図には a～c 類遺跡のみを示している。前時期に引き続き遺跡は広い範囲に分布する。愛鷹山麓では、南東麓を中心とした一帯に密集する傾向があるが、d 類遺跡まで含めると遺跡分布は北側・西側にも広がる。箱根山麓も同様で、標高 400m 域で初めて a 類遺跡が現れる (観音洞 G 遺跡)。

その他、箱根東麓の大越遺跡や、伊豆方面の湯ヶ洞山遺跡でもまとまった資料が得られている。また地図の範囲外になるが、山梨県下の富士川流域では天神堂遺跡がある。調査範囲が限られているため確定的ではないが規模は b 類である。

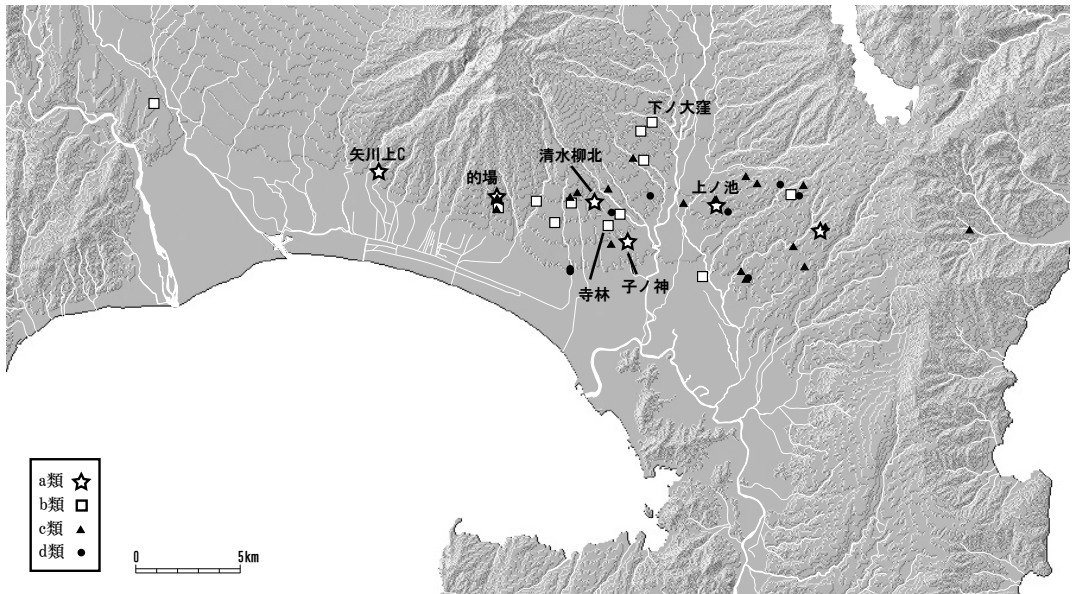


図21 休場層直下黒色帯～休場層下位の遺跡分布

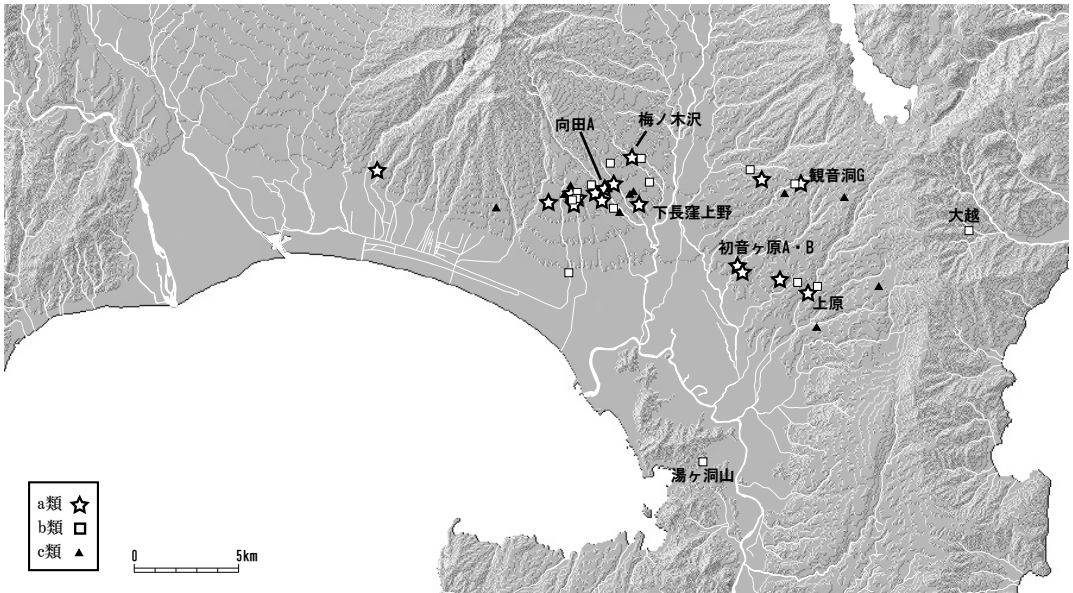


図22 砂川並行期の遺跡分布

静岡県東部地域における後期旧石器時代の石器群と遺跡分布の変遷

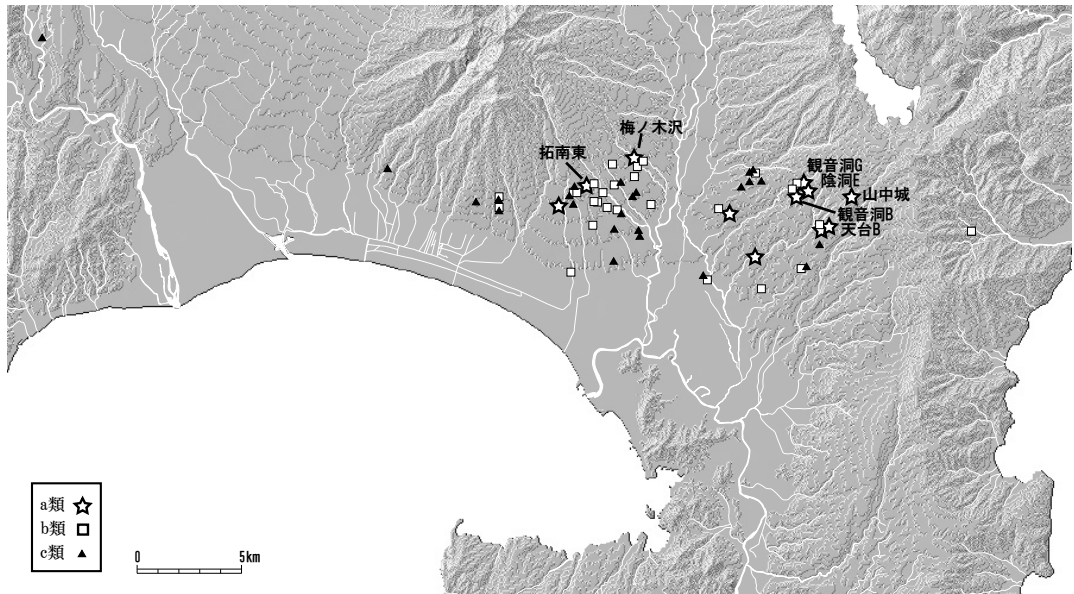


図23 ナイフ形石器終末期～尖頭器石器群の遺跡分布

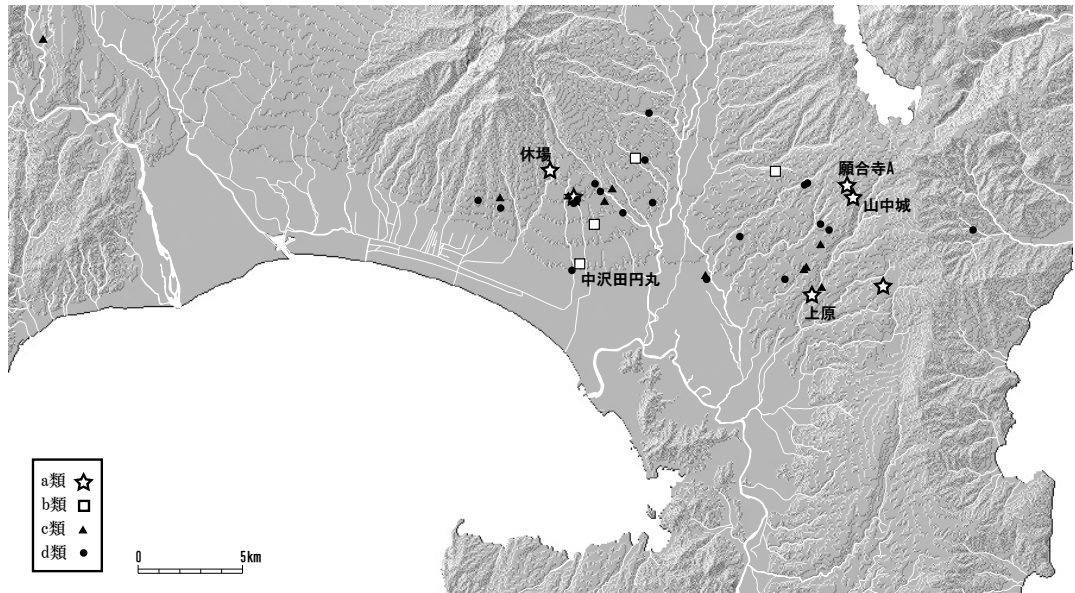


図24 細石刃石器群の遺跡分布

#### (10) ナイフ形石器終末期～尖頭器石器群 (図 23)

前時期と同様の理由で分布図には a～c 類遺跡のみを示している。

遺跡分布の傾向は概ね前時期の傾向を踏襲していると言える。箱根山麓では観音洞 B 遺跡、観音洞 G 遺跡、陰洞 E 遺跡、山中城三ノ丸遺跡など、高標高の地点の遺跡が増加しているが、筆者はこれらが、この時期に利用が増加する畑宿産黒曜石の供給と結びついて残されたものと解釈している (中村 2006)。最近では箱根山中、標高約 750m の地点の諏訪ノ台 A 遺跡における小面積の確認調査で、休場層上位から礫群 1 基と石器 3 点が見つかっている (三島市教育委員会 2008)。出土資料からは厳密な時期認定に至ることができないが、箱根西麓の高所にまで後期旧石器時代末葉の遺跡が広がっていたことを示す資料である。

#### (11) 細石刃石器群 (図 24)

分布図には d 類遺跡まで含めて示しているが、前時期より遺跡数は減少している。遺跡分布自体は愛鷹山麓、箱根西麓の広い範囲に及ぶという点で同様であるが、箱根山麓では山中城三ノ丸遺跡、願合寺 A 遺跡と標高 500m を超える地点にも a 類遺跡が見られる。細石刃石器群には箱根系の黒曜石や黒色安山岩はほとんど利用されないため、当然ながらこれらは前時期の遺跡とは目的の異なるものであったと考えられる。愛鷹山麓の休場遺跡も標高は 250m 程度にすぎないが、これ以前の時期の遺跡と比べて明らかに高地寄りの地点で、愛鷹南麓に扇状に広がるなだらかな丘陵の頂点付近に位置する。こうした山地寄りの地点では当然ながら遺跡の調査密度自体が低いことを考慮しなければならぬが、当該期には遺跡が垂直方向へも広がることが注目される。

### 5. まとめと考察

前節で述べた遺跡分布の変化について簡潔にまとめ、またそこから推測される点について指摘しておく。

時期別に遺跡が増減することはすでに知られてきたことであるが、遺跡分布の広がりもこれに伴って変化している。第Ⅴ黒色帯、第Ⅲ黒色帯～第Ⅱ黒色帯、及び休場層直下黒色帯以降が遺跡分布の拡大期に当たり、第Ⅳ黒色帯～第Ⅲスコリア帯、ニセロームが遺跡分布の縮小期に当たる。こうした全般的な傾向は、高尾氏 (2006) により示された遺跡の数量的変化の傾向を追認するものである。分布の縮小期には全体的に遺跡規模も縮小し、拡大期には遺跡規模も拡大する傾向がある。

こうした遺跡の増減の原因は何であったのだろうか。まずは気候環境の変化が想定される。愛鷹・箱根山麓の後期旧石器時代における気候環境については、海洋性の気候や沿岸流の影響により比較的温暖で湿潤な気候が保たれていた可能性が考えられている (佐瀬他 2006)。植生分析では、初音ヶ原 B 遺跡における植物珪酸体分析で、AT 層準付近でササ属がやや増加するものの最終氷期を通じ



てメダケ属が優勢との結果が得られており（古環境研究所 1999、杉山 2010）、AT 降灰に先立つ寒冷化（辻・小杉 1991）がこの地域でも起こっていたことが想定される。ニセローム期における遺跡の減少はこの寒冷化と関連付けられるかもしれない。一方、第Ⅲスコリア帯下半の遺跡が少ない点は、スコリア層の累積に示される活発な火山活動と堆積速度の早さに関連付けられるが、それに先立つ第Ⅳ黒色帯から遺跡が減少する原因については現在のところ不明である。

ところで、後期旧石器時代を通して遺跡分布を見た場合、愛鷹南東麓、具体的には高橋川以東から、梅ノ木沢川以西の扇状の範囲では後期旧石器時代を通じて遺跡が存在し、また同時期でも規模が大きい部類の遺跡が分布している。これに対し、愛鷹山麓のその他の領域や箱根西麓では、遺跡分布の縮小期には遺跡がほとんどなくなってしまうという現象が観察される。これは多分に愛鷹山南東麓における調査密度の高さを反映しているであろうが、それ以外の地域でも相応に重層遺跡が発掘されている点を考慮すると、ある程度実態を反映しているものと言えるであろう。

愛鷹山南東麓とその他の領域との違いとしてはまず地形が考えられる。従来から知られている通り（今村 2006 他）、高橋川以東桃沢川以西の地域は開析谷の発達が弱く緩やかな斜面地形が広がっており、その北東側、梅ノ木沢川までの地域も比較的幅の広い尾根のある緩やかな地形となっている。ここから外れる愛鷹南麓及び東麓、箱根西麓の地域は開析谷により刻まれた幅の狭い尾根が連なる地形となっている。後期旧石器時代の遺跡はこの愛鷹南東麓の緩斜面地を好んで選地しており、後期旧石器時代を通じて主たる開発領域となっていたと考えられる。

後期旧石器時代後半期、第Ⅰ黒色帯期以降になると、開発領域が日本列島内の地域別に固定化し、地域適応が進行していったとされているが（佐藤 1992）、第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層期以降の遺跡分布域の拡大はこうした動きに沿ったものである。その際も、第Ⅰ黒色帯～第Ⅰスコリア層期に見られるように、箱根山麓では愛鷹南東麓に近い側から大規模遺跡が形成されており、この点でも愛鷹南東麓の開発領域としての優位性を示唆している。

砂川並行期以降、箱根西麓にも多くの大規模遺跡が展開するようになりこの傾向は薄れるが、より明確に変化するのには細石刃石器群の時期においてである。愛鷹南東麓でも遺跡が展開しているが、箱根西麓では、おそらく箱根の石材産地開発と関係なく標高の高い山腹に遺跡が展開していることから、高地から低位丘陵までを領域に取り込んだ居住パターンが現れており、細石刃石器群に対応する開発領域や行動戦略の転換が起こっていると推測される。

## 結語

本稿では編年の整理に紙数を費やしてしまい、遺跡分布の検討は概観的なものとなってしまったが、今後詳細な分析を進めていきたいと考えている。

本稿を作成するに当たり、資料の閲覧等で以下の機関にご協力いただきました。記して感謝いたします。

静岡県教育委員会文化財課（当時） 長泉町文化財展示館 沼津市文化財センター 三島市教育委員会生涯学習課

註

- 1) 箱根では神奈川県下の朝日遺跡で発掘調査が行われている（箱根町誌編纂委員会 1967）が、調査は小面積に留まっている。柏峠では近年旧石器時代の所産と見られる資料が表採されている（関口・諏訪間 2005；阿部他 2010）が発掘調査はまだ行われていない。また、伊豆・箱根では数か所のガラス質黒色安山岩原産地が知られているが、旧石器時代の資料がまとまって出土した事例は知られていない。縄文時代草創期の甲之背遺跡（中伊豆町教育委員会 1996）が知られている程度である。
- 2) 大半が表採資料等であるが、湯ヶ洞山遺跡、笹子遺跡など発掘調査資料が数遺跡ある。
- 3) 例えば第 3 期については、設定当初から角錐状石器や搔器、鋸歯状加工、大形石刃などを指標とする段階の特徴の記載がなされている（笹原<sup>考</sup>1995）が、個別石器群の記載においてはそれを特に顧みることなく第 I 黒色帯出土＝ a 段階、休場層直下黒色帯出土＝ b 段階といった単純な読み替えがしばしば行われている。その他、第 4 期の 3 段階細分についても、資料の増加とともに当初の設定に再検討が必要となっており（池谷他 2010）、最近の改訂編年案（笹原<sup>考</sup>2005；高尾 2006）では採用されていないが、やはりそれを整理することなく第 4 期 b 段階、c 段階などに位置づける記載が散見される。
- 4) 井出丸山遺跡の VII 黒色帯の石器群については、沼津市文化財センターの池谷信之氏、原田雄紀氏、前嶋秀張氏にご教示をいただいた。
- 5) 清水柳北遺跡東尾根 BB I の石器群は、出土層位から上部と下部に分けられることが報告書で指摘されている。ここで挙げているのは第 I 黒色帯下部出土とされる 1～4 号石器ブロック、1 号配石などの遺物群である。
- 6) イラウネ遺跡調査時はこの層は分離されておらず、第 I スコリア層のすぐ上から休場層とされていた。
- 7) その他、この時期の尖頭器としては早くから西大曲遺跡の資料が知られており、「角錐状石器にその系統が追えそうな形態」（高尾 2006:82 頁）とされるが、やはり類例の追加がなく、また現在資料の実見ができないため立ち入った検討を加えるのは控えておく。一方、上松沢平遺跡 IV 文化層の石器群について、愛鷹・箱根編年における第 4 期の初め、或いは第 3 期から第 4 期への過渡的様相を示すものとして注目する見解がある（高尾 前掲）が、この遺跡では肝心の尖頭器、ナイフ形石器の大半は層位認定の基準となっている石器集中や礫群（報告書掲載の属性表では休場層中位でまとまっている）から外れて散在的に分布し、出土層位も富士黒土層や漸移層など上層へ浮いたものが多いため、石器群のセット関係を議論する資料としては適切でない。同様の理由で寺林遺跡 III 文化層の尖頭器の相伴についても慎重に捉えたほうがよいと考えられる。
- 8) 例えば、清水柳北遺跡東尾根休場層の石器群はまとめて愛鷹・箱根第 4 期後半や「段階 c」などと位置づけられることが多かったが、一部砂川並行期以前の休場層下位に位置づけるべき石器群が含まれていると考えられる（中村 2011）。同様に、第 4 期後半に位置づけられてきた石器群には休場層下位相当の石器群が含まれている可能性を検討していく必要がある。
- 9) 梅ノ木沢遺跡は谷中に立地するためか土層の色調や堆積状況が異なり、尾根上の遺跡とはやや異なる分層となっている。休場層は YL 1～5 に分けられ、YL5 が休場層下位、YL4～2 が休場層中位、YL2 上部～YL1 が休場層上位に対応するものとされている。
- 10) 石器数は調査精度に影響され、特に土壌水洗選別で微細遺物の検出を行った場合は石器数が数十倍以上となることもあり得る。しかし、当地域で水洗選別が実施された事例は、管見の限り西洞遺跡 b 区（沼津市教育委員会 1999）の VI 黒色帯直上で行われているのが知られるのみで、実施例は限られている。基本的には通常の発掘作業による考え、調査精度の差はそれほど大きくなかったと仮定する。

参考文献

《論文等》

- 阿部敬・中村雄紀・三好元樹・柴田亮平 2010「静岡県柏峠黒曜石原産地の産状に関する考古学的評価」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』16：9-18
- 池谷信之 2009a『黒曜石考古学』新泉社
- 池谷信之 2009b「旧石器時代における陥穴猟と石材獲得・石器製作行動：愛鷹・箱根山麓 BB III層期を中心として」『駿台史学』135：21-43
- 池谷信之・富樫孝志・麻柄一志 2010「東海・北陸地方」稲田孝司・佐藤宏之編『講座日本の考古学1：旧石器時代（上）』青木書店、473-504
- 今村啓爾 2006「先土器時代陥穴の使用方法：静岡県愛鷹山麓 BB III期の場合」藤本強編『生業の考古学』同成社、27-38
- 古環境研究所 1999「初音ヶ原遺跡の植物珪酸体分析」『初音ヶ原遺跡』三島市教育委員会、384-392
- 笹原千賀子 2010「調査の成果と課題」『梅ノ木沢遺跡Ⅲ（旧石器時代編2・縄文時代草創期編）第二東名 No.143-2 地点、CR35 地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第233集、235-242
- 笹原芳郎 1995「第2期・第3期の石器群」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年：収録集』静岡県考古学会シンポジウムIX、静岡県考古学会、22-27
- 笹原芳郎 1996「第2期・第3期の石器群をめぐって」『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年：収録集』静岡県考古学会シンポジウムIX、静岡県考古学会、45-48
- 笹原芳郎 2005「愛鷹・箱根旧石器時代編年の現状と課題」『地域と文化の考古学I』明治大学文学部考古学研究室、91-106
- 佐瀬隆・加藤芳郎・細野衛・青木久美子・渡邊眞紀子 2006「愛鷹山麓域における黒ボク土層生成史：最終氷期以降における黒ボク土層生成開始時期の解説」『地球科学』60(2)：147-163
- 佐藤宏之 1991『日本旧石器文化の構造と進化』柏書房
- 静岡県考古学会 1995『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 予稿集』静岡県考古学会シンポジウムIX
- 静岡県考古学会 1996『愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年 収録集』静岡県考古学会シンポジウムIX
- 杉原荘介・小野真一 1965「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』3(2)：1-33
- 杉山真二 2010「更新世の植生と環境」稲田孝司・佐藤宏之編『講座日本の考古学1：旧石器時代（上）』青木書店、156-177
- 関口昌和・諏訪間順 2005「伊豆柏峠黒曜石原産地の石刀石核」『旧石器研究』1：81-94
- 高尾好之 1994「愛鷹山麓・箱根西麓の後期旧石器時代石器群編年試案」『地域と考古学：向坂鋼二先生還暦記念論集』、1-29
- 高尾好之 2006「東海地方の地域編年」安齋正人・佐藤宏之編『旧石器時代の地域編年の研究』同成社、61-102
- 高尾好之 2002「旧石器時代遺跡の概観」『沼津市史 資料編 考古』沼津市、2-5
- 高橋 豊 1997「笹子遺跡・上西ノ窪A遺跡の表層地質：遺跡土層断面の層序区分と堆積時の古環境について」『笹子遺跡・上西ノ窪A遺跡』大仁町教育委員会、付編1-19
- 辻誠一郎・小杉正人 1991「始良 Tn 火山灰（AT）が生態系に及ぼした影響」『第四紀研究』30(5)：419-426
- 中村雄紀 2005「愛鷹・箱根山麓における「ナイフ形石器終末期」の遺跡群」『石器文化研究』12：121-146
- 中村雄紀 2006「後期旧石器時代後半期の居住形態の地域的様相：愛鷹・箱根第3期・第4期の遺跡群」『東京大学考古学研究室研究紀要』20：1-36
- 中村雄紀 2011「愛鷹・箱根山麓における後期旧石器時代後半期前葉の石器群：編年及び年代の整理」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』17：1-13

《報告書》

- 熱海市教育委員会 1995『大越遺跡』
- 伊豆長岡町教育委員会 1993『湯ヶ洞山遺跡発掘調査の記録』
- 大仁町教育委員会 1997『笹子遺跡・上西ノ窪 A 遺跡』
- 加藤学園考古学研究所 2002『佐野片平山遺跡群』
- 函南町教育委員会 1989『函南スプリングスゴルフ場用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 I』
- 函南町教育委員会 2001『上原遺跡』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994『焼場遺跡 A 地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 55 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1995『下原遺跡 I』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 64 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996a『加茂ノ洞 B 遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 71 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996b『下原遺跡 II』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 72 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996c『焼場遺跡 B 地点・五百司遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 73 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997a『北神馬土手遺跡他 I (遺構編本文)』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 74 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997b『北神馬土手遺跡他 I (遺構編図版)』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 74 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997c『八田原遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 87 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1997d『北神馬土手遺跡他 I (遺物編)』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 89 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998a『上ノ池遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 99 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998b『桧林遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 101 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998c『下原遺跡 III』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 106 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1999『生茨沢遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 114 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2000『池田 B 遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 122 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003a『鉄平遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 137 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003b『大岡元長窪線関連遺跡 I』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 138 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003c『寺林遺跡・虎杖原古墳』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 142 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004『上松沢平遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 145 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006『西山遺跡 第二東名 No. 2 地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 170 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007a『佛ヶ尾遺跡 第二東名 No.147 地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 175 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007b『向田 A 遺跡 第二東名 No.140 地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 178 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008a『元野遺跡 第二東名 No.19 地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 189 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008b『下ノ大窪遺跡 第二東名 No.146 地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 190 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008c『老平遺跡 第二東名 No.145 地点』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 192 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008d『裾野市富沢・桃園の遺跡群』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告

第 193 集

- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009a 『矢川上 C 遺跡 第二東名 No.39- II 地点』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 200 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009b 『大岡元長窪線関連遺跡Ⅲ』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 205 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009c 『梅ノ木沢遺跡Ⅱ (旧石器時代編) 第二東名 No.143-2 地点、CR35 地点』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 206 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009d 『秋葉林遺跡 I 第二東名 No.25 地点 (旧石器時代～縄文時代草創期編)』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 207 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009e 『桜畑上遺跡 第二東名 No.1 地点』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 208 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009f 『丸尾北遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 210 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009g 『イタドリ A・イタドリ B・イタドリ C 遺跡 第二東名 No.13・14・15 地点』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 211 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010a 『細尾遺跡 (第二東名 No.141 地点)』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 222 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010b 『沼津市井出・石川神ヶ沢の遺跡群』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 223 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010c 『桜畑上遺跡 I (旧石器時代～縄文時代草創期編)』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 224 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010d 『的場古墳群・的場遺跡 第二東名 NO.26 地点』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 227 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010e 『天ヶ沢東遺跡・古木戸 A 遺跡・古木戸 B 遺跡 (第二東名 No.44 地点)』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 228 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010f 『下高原遺跡 第二東名土一 2 地点他』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 229 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010g 『富士石遺跡 I 第二東名 No.142 地点旧石器時代 (AT 下位) 編』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 232 集
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010h 『梅ノ木沢遺跡Ⅲ (旧石器時代編 2・縄文時代草創期編) 第二東名 No.143-2 地点、CR35 地点』 静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第 233 集
- 芝川町教育委員会 1995 『小塚遺跡』
- 中伊豆町教育委員会 1996 『甲之背遺跡』
- 長泉町教育委員会 1976 『陣場上・平畦遺跡』
- 長泉町教育委員会 1978 『西願寺遺跡 (A 地区)・長久保城址 (二の丸)』
- 長泉町教育委員会 1979 『下長窪上野遺跡』
- 長泉町教育委員会 1981 『八分平 B・富士石遺跡』
- 長泉町教育委員会 1986 『中尾・イラウネ・野台』
- 長泉町教育委員会 1989 『富士石遺跡群』
- 長泉町教育委員会 1990 『上山地遺跡』
- 長泉町教育委員会 1994 『平畦遺跡・陣場上 B 遺跡』
- 長泉町教育委員会 2001 『木戸遺跡・中見代遺跡・東野Ⅱ橋下遺跡』
- 長泉町教育委員会 2006 『追平 B 遺跡』
- 沼津考古学研究所 1977 『駿河小塚』 研究報告第七冊
- 沼津市教育委員会 1981 『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書第 23 集

- 沼津市教育委員会 1982『一般国道 246 号裾野バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 27 集
- 沼津市教育委員会 1985『寺林南遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 33 集
- 沼津市教育委員会 1987『広合遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 41 集
- 沼津市教育委員会 1988『土手上・中見代第Ⅱ・第Ⅲ発掘調査報告書（足高尾上 No1・6・7 遺跡）』沼津市文化財調査報告書第 43 集
- 沼津市教育委員会 1989a『清水柳北遺跡発掘調査報告書その 2』沼津市文化財調査報告書第 48 集
- 沼津市教育委員会 1989b『中見代第Ⅰ遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 45 集
- 沼津市教育委員会 1990『広合遺跡（b・c・d 区）・広合南遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 49 集
- 沼津市教育委員会 1991『広合遺跡（e 区）・二ツ洞遺跡（a 区）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 52 集
- 沼津市教育委員会 1992『尾上イラウネ遺跡発掘調査報告書Ⅱ』沼津市文化財調査報告書第 53 集
- 沼津市教育委員会 1993『二ツ洞遺跡（b・c 区）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 54 集
- 沼津市教育委員会 1995『土手上遺跡（b・c 区）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 56 集
- 沼津市教育委員会 1996a『西洞（a 区）・葛原沢遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 59 集
- 沼津市教育委員会 1996b『柏葉尾遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 61 集
- 沼津市教育委員会 1997『土手上遺跡（d・e 区-1）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 63 集
- 沼津市教育委員会 1998a『拓南東遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 65 集
- 沼津市教育委員会 1998b『土手上遺跡（d・e 区-2）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 64 集
- 沼津市教育委員会 1999『西洞（b 区-1）遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 69 集
- 沼津市教育委員会 2002a『稻荷林遺跡発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 80 集
- 沼津市教育委員会 2002b『尾上イラウネ北遺跡（第 2 次）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 81 集
- 沼津市教育委員会 2002c『西洞遺跡（c・d 区）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 78 集
- 沼津市教育委員会 2004『埋蔵文化財発掘調査報告書 4』沼津市文化財調査報告書第 86 集
- 沼津市教育委員会 2009a『清水柳北遺跡（第 3 次）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 96 集
- 沼津市教育委員会 2009b『稻荷林遺跡（第 2 次）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 95 集
- 沼津市教育委員会 2010『尾老遺跡（第 2 次）・清水柳北遺跡（第 2 次）発掘調査報告書』沼津市文化財調査報告書第 98 集
- 沼津市史編纂委員会 2002『沼津市史 資料編 考古』沼津市
- 箱根町誌編纂委員会 1967『箱根町誌』第 1 巻
- 三島市教育委員会 1989『北原菅遺跡』
- 三島市教育委員会 1990a『三島スプリングス C.C ゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
- 三島市教育委員会 1990b『十石洞遺跡』
- 三島市教育委員会 1992a『三島スプリングス C.C ゴルフ場内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』
- 三島市教育委員会 1992b『三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』
- 三島市教育委員会 1994a『五輪・観音洞・元山中・陰洞遺跡Ⅰ』
- 三島市教育委員会 1994b『五輪・観音洞・元山中・陰洞遺跡Ⅱ』
- 三島市教育委員会 1994c『三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』
- 三島市教育委員会 1995a『山中城跡三ノ丸第 1 地点』
- 三島市教育委員会 1995b『三島市埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ』
- 三島市教育委員会 1997『小平 C 遺跡 小平 B 遺跡』
- 三島市教育委員会 1998a『中村分遺跡 天台 B 遺跡 台崎 C 遺跡』

静岡県東部地域における後期旧石器時代の石器群と遺跡分布の変遷

- 三島市教育委員会 1998b 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告VI』  
三島市教育委員会 1999 『初音ヶ原遺跡』  
三島市教育委員会 2002a 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告VII』  
三島市教育委員会 2002b 『初音ヶ原 B 遺跡第 4 地点』  
三島市教育委員会 2004 『南山 D 遺跡 東山遺跡 香音 II -D 遺跡 奥山遺跡』  
三島市教育委員会 2005 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告書 X』  
三島市教育委員会 2006 『静岡県三島市文化財年報』 17  
三島市教育委員会 2008 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告書 X III』  
三島市教育委員会 2009a 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告書 XIV』  
三島市教育委員会 2009b 『静岡県三島市文化財年報』 20  
三島市教育委員会 2010a 『三島市埋蔵文化財発掘調査報告書 X V』  
三島市教育委員会 2010b 『静岡県三島市文化財年報』 21

図版出典

- 図 3-1 ～ 8 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010g、9 ～ 11 : 長泉町教育委員会 2006、12 ～ 14 : 静岡県考古学会 1995  
図 4-1 ～ 8 : 沼津市教育委員会 1998b、9 ～ 13 : 沼津市教育委員会 1989a、14 ～ 18 : 沼津市教育委員会 1989b  
図 5-1 ～ 5 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007b、6・7 : 沼津市教育委員会 1989b、8 ～ 13 : 沼津市教育委員会 1988  
図 6-1 ～ 9 : 沼津市教育委員会 2004、10 ～ 16 : 沼津市教育委員会 1989b、17 ～ 20 : 函南町教育委員会 2001、21 ～ 24 : 三島市教育委員会 1992b、25 ～ 28 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010g  
図 7-1 ～ 11 : 三島市教育委員会 1999、12 ～ 14 : 沼津市史編纂委員会 2002、15 ～ 21 : 沼津市教育委員会 1989a、22 ～ 27 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010g  
図 8-1 ～ 5 : 沼津市教育委員会 1989a、6 ～ 8 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009g、9 ～ 13 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010g  
図 9-1 ～ 4 : 沼津市教育委員会 1982、5 ～ 8 : 長泉町教育委員会 1994、9・10 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003b、11 ～ 14 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1998a、15 ～ 17 : 長泉町教育委員会 1986、18 ～ 20 : 沼津市教育委員会 1989b  
図 10-1 ～ 4 : 沼津市教育委員会 1982、5・6 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009b、7 ～ 9 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009c、10 ～ 12 : 沼津市史編纂委員会 2002、13 ～ 15 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008b、16 ～ 19 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009d、20 ～ 22 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008d、23 ～ 26 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003c  
図 11-1 ～ 11 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007b、12 ～ 18 : 長泉町教育委員会 1979、19 ～ 26 : 三島市教育委員会 1999  
図 12-1 ～ 10 : 三島市教育委員会 1998a、11 ～ 20 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2003a、21 ～ 38 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010h  
図 13-1 ～ 7 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010h  
図 14-1 ～ 9 : 函南町教育委員会 2001、10 : 静岡県埋蔵文化財調査研究所 2009d

## Trajectory of Change in Upper Paleolithic Industries and Distribution of Sites in Eastern Shizuoka.

NAKAMURA Yuuki

In the Eastern Shizuoka there are many Paleolithic sites, especially at the foot of Mt. Ashitaka and Hakone. This paper describes chronological sequence of the above area's Upper Paleolithic lithic industries and analyzes the Upper Paleolithic occupation of this area based on site distribution pattern.

Even though it must be taken into account that landscape evolution and biased excavation areas have effect on distribution of sites revealed at the present, the result of analysis suggests as below: distribution of sites alternated expansion with contraction correlated with average size of sites. It expanded during Black Band V, Black Band II and after Sunagawa Phase, contracted during Black Band IV, Scoria Layer III and *Nise* Loam. Until the early part of Late Upper Paleolithic, main occupational area were at Southeastern foot hills of Mt. Ashitaka, where sites distributed continually during contraction of distribution. In the late part of Late Upper Paleolithic, main occupational area expanded gradually around Mt. Ashitaka and Hakone, and ranged from low foothills to higher hills in the period of microblade industry occupational area.